天保仇討無惨旅　（第４部）

懐妊

朝の微睡(まどろみ)の中、物憂げに身を起こし、志乃は寝乱れた髪をかき上げた。
隣では志乃の身体を明け方近くまで貪った捨太郎が満足したように大きな鼾(いびき)をかいてゴロンと寝ていた。
朝の膳は既に志乃達を閉じ込めた檻の中にも届けられていた。
空腹を覚えた志乃は松花堂弁当の様な様々な総菜が盛られた入れ物の蓋を開いた。
絶え間なく女達に性的虐待を繰り返す嗜虐者達ではあったが、少しは女達の健康を気にしているのか、三度の食事は美味で精の付くご馳走がふんだんに供されていた。
この豪勢なご馳走が男達を喜ばすための性技の活力の素となり排泄する物の素となるのかと悲しい気持ちになりながら、箸を進めていると、ふと向かい側の檻に閉じ込められた慎之介と千鶴の様子が気になった。
綺麗に畳まれた布団の横で、似合いの若夫婦の様に並んで正座して朝の膳を摂っているところであったが、千鶴は少し箸をつけただけで、そのまま弁当箱の蓋を閉じてしまった。
「どうした千鶴？もう食べぬのか？」
隣で慎之介が心配そうに声を掛けた。
突然ウッと呻くと身体を丸めて嘔吐しそうになった。
慌てた慎之介が若妻の背中を摩った。
「千鶴！もしや？」
その様子を目撃した志乃が千鶴に声を掛けた。
「申し訳ございません！」
突然千鶴が床に頭を擦り付けて土下座して謝り始めた。
「千鶴は下賤の身に在りながら慎之介様の御胤(おたね)を頂戴してしまいました！」
と、泣き叫ぶように声を上げた。
「千鶴、それは本当に慎之介の子ですか？」
「はい！慎之介様の御子に間違いありません！」
最近男達の関心は新しく入った女達に向いており、夜毎の慎之介との閨以外千鶴と交わった

男が居ないのは志乃も気付いていたので、千鶴の胎の子は慎之介の子に間違いないと確信した。
「でかしました、千鶴！」
大きな声で千鶴を励ました。
「例えどの様な状況でも、千鶴の胎の中の子は笹川家の大事な跡取りです！千鶴！身体を労わって丈夫な子を産むのですよ！」
「ああ・・志乃様！」
志乃の言葉を受けて床に顔を押し付けたまま感涙に咽んだ。
「慎之介も千鶴を労わって上げるのですよ！」
「はい！姉上！」
姉の言葉に力強く返事した。

朝の調教を開始するためお銀が杉作達不良下士を引き連れてやって来た。
舞台での男役には落第した男達であったが、そのまま残った男達を肉体調教の助手や雑用などに、お銀は顎で使っているのであった。
それに気づいた志乃が牢の格子を握り締めお銀に声を上げた。
「お銀様！千鶴は慎之介の子を身籠りました。何卒、肉体鍛錬や舞台に上げるのはお止め下さい！千鶴の分は志乃が喜んでお引き受けします！」
と、鬼の様な女に哀願した。
「そうかい、それはおめでとう！・・今が一番大事な時だから無理をさして水にしてしまっても可愛そうだからね・・分ったよ！」
「有難うございます！」
お銀の意外と物分かりの良い返事に深々と頭を下げた。
「ボテ腹女の白黒は舞台で受けるんだよ。特に臨月の女の男との絡みなんか、客たちが大喜びすることは間違いなしさ！千鶴も胎の中の子が安定して、腹が迫り出して来たら舞台に上がってもらうからね！」
この残忍な女は妊娠した女にまで恥掻き芸を演じさせようとするのかと思うと暗澹とした気分になった。
「まあ、やりたい盛りの若い男と女が一つ檻の中に居たら子供が出来ても不思議は無いね。それにしても毎晩ヤリ狂っている志乃には懐妊の兆候は無いね。彼奴(あいつ)は身体ばかりデカいだ

けで種無しなのかね？」と、檻の中で大鼾をかく捨太郎を見て笑った。
「まあ、これで慎之介も種馬として使えることが分かったよ・・今後おシズと同じ檻に入れたり、お福と同じ檻に入れてみようかね・・お藤と同じ檻の中で暮らさせても面白いかも知れないね。案外、歳に似合わず慎之介の子を産むかも知れないよ！」と、笑いながら口にした。
慎之介が自分から引き離されて、別の女と同じ檻の中で同棲させられるという悲惨な状況が目に浮かんで、イヤーッ！と泣き崩れた。

密貿易の島

温かいお藤の胸の谷間に顔を埋めたまま慎之介は、柔らかく豊かな乳房に頬ズリしていた。
幼い頃母を失い母親の愛に飢えていた慎之介は、これまで母に甘えることが出来なかった分をお藤に甘えることで取り返そうとしているのか、すっかり幼児退行してしまったように、指に粘りつくようなモッチリとした肌を撫で、乳のような体臭を嗅いでいた。
お藤もそんな慎之介の姿に、殺された我が息子の姿が偲ばれ、固く抱きしめた。
しかし、幼い男の子とその母ではない男女が互いに全裸で、一つの布団に横たわったまま互いに抱き合うという事は、そのまま男女の行為に移行するのに時間は掛からなかった。
美熟女と美少年は互いに甘美な夢の中に埋没するように求め合った。

最初に慎之介がお藤の居る檻に閉じ込められた際は、互いにぎこちない処があったが、母親の愛に飢えた少年と子を失った母が結び付くのはある意味当然であったかも知れない。
割を食ったのはお福であった。
お福は慎之介の居なくなった檻に千鶴と一緒に閉じ込められ、互いに慎之介を奪い合う恋敵のような険悪な雰囲気を感じさせていた。
慎之介の子を宿し、せり出し始めた腹を愛おし気に撫で摩る、どこの馬の骨とも分からない、年下の女の様子を忌々しく眺めた。
そしてもう一つお福をイラつかせるのは、自分の母親と慎之介が抱き合う姿を目の前で見せつけられる事であった。
幼い頃から何でも欲しい物は手に入れて来た我儘娘にとって、思わず女を引き付ける様な、

まるで錦絵に描かれた若衆の様に整った顔立ちの美少年である慎之介は当然自分の物にならねばならず、実の母が自分を差し置いて慎之介を抱くなど到底許せない事であった。
千鶴にとっても年季を経た老練な悪女が、歳若く何も分からない慎之介を手管を使って誘惑したのだと信じ込み、お藤を呪った。
牢舎の中は奇妙な三角関係による嫉妬の嵐が渦巻いていた。

玄斎が篤馬を伴って牢舎にやって来た。そして、お藤と慎之介を閉じ込めた檻の前で脚を止めて好色な目で中をのぞき込んだ。
其処には親子ほども歳の離れた美熟女と美少年の濃厚な愛欲の姿があった。
「どうじゃ、お藤！気持ち良いか？」
忍び泣くような甘美な声音を鼻から漏らしながら、汗に塗れて夢中で慎之介を抱き締めるお藤に声を掛けた。
「ああ・・良い・・」
と、慎之介から乳首を夢中で吸われるお藤の口から掠れた声が漏れたが、それは玄斎への返事であったのか、自分を貫く若者の情熱に煽られて無意識に出た言葉か判らなかった。
慎之介の火のように熱い肉塊を自分の女の中に受け入れ、まるでその熱鉄を鎮火しようとするかのように、豊富な愛液を滴らせるお藤には玄斎達から覗かれているという意識は喪失していた。
10 年前、突然夫を失って以来、頑なに閉じていた女の秘めた情念が、慎之介の激しく熱い男の情念によりゆっくりと開けられていき、夫にしか見せたことの無かった媚態を露わにさせ始めていた。
遅れて惣右衛門が慌てた様子でやって来た。
「見て見よ！恵比寿屋！やはり、お藤はガマガエルの様なお主より紅顔の美少年の方がお気に入りの様じゃ！天にも昇る気持ちでまぐわっておるわ！三十させ頃、四十し頃とはよく言ったものじゃ！」
今は人目も気にならない様に愛し合うお藤と慎之介の様子を見ながら大笑した。
「年増女の深情けと言って、熟女は一旦身体に火が付くと止めようがありませんからな・・」
と、二人の熱い交情を好色な目で見ながら、篤馬もつられて笑い声を上げた。
惣右衛門は長年恋し続けて来た女が、自分には見せたことの無い妖艶な姿態を慎之介に見せ、若い肉体を激しく求めている事に嫉妬の念がムラムラと込み上げていた。

この後でこの浮気女を厳しく折檻してやる！と心に念じながら、今は緊急事態を玄斎に伝える方が先と、
「玄斎様！エライことになりました！」と、叫んだ。
「どうしたと言うのじゃ！」
狼狽える惣右衛門に問い掛けた・
「紅毛人の慈英夢須の奴が武家の女を抱きたいと言い出しましたんや！」
「島には身体を売る女は居らぬのか？」
「いえ、船乗り相手の舟饅頭（ふなまんじゅう）は大勢居てますが、磯臭い色気の無い女は飽きたという事ですわ。」
「それで、どうするのだ？」
「はい・・今や店の売り上げの大半は慈英夢須からの密貿易品が占めてますから、ここは慈英夢須の顔を立てん訳にはいかんでしょうな・・」
折角手に入れた美女達を羅紗縮（らしゃめん）として差し出すことに残念そうに口にした。
「そうすると、武家の女というからには志乃、千鶴は身重ゆえ外すとして、姿・顔から言っておシズとお福というところか・・」
外国人の相手をさせる女を数えた。
「良かったでは無いか、お藤！娘の留守中気兼ね無く慎之介と抱き合えるぞ！」
笑いながら牢の中に声を掛けた。
「そうどすな・・留守の間の舞台は大筋、慎之介とお藤の白黒とおセイと捨太郎の絡みという事にしましょか。さっそくお銀はんに段取りを立ててもらいまひょ」
「おセイのケツメドはピカ一じゃ！この味を捨太郎に教えてやったら病みつきになるかも知れんな。」
おセイとの肛門性交にぞっこんの篤馬が声を上げた。
「ただ、今のまま捨太郎のモノを突っ込まれたら裂けてしまうからな。よし！早速尻の穴を広げる鍛錬に入ろう！」
牢の中で男達の話を聞いていたおセイとおシズの姉妹が抱き合いながら震えていた。
「しかし、尻穴の味に目覚めた捨太郎が慎之介のケツメドを狙ったら面倒じゃな・・」
玄斎が混ぜっ返した。
「そんな男同士の気持ち悪い見せ物、誰が見たがりまっかいな！」
惣右衛門が笑い返した。

「何しろ捨て郎のイチモツはデカいからな。これを二本易々と受け入れられる位にならねばもたぬぞ。」
篤馬が野太い鼈甲の張型をおセイに見せ付けながら残酷な言葉を口にした。
「ああ・・もうお許しください・・」
篤馬の言葉に身内から込み上げる苦痛に呻吟しながら切れ切れに哀願した。
おセイは両手を牢の格子に結び付けられ、身体を前に折って尻を篤馬の方に向けていた。
そして、篤馬に向かって堂々と突き出した男心を擽る官能的な尻肉の狭間の中心部には既に二本のトネリコの木を削って作った筒具が突き立てられており、これ以上無いほど肛門を押し広げられており、眉根を寄せて苦悶するおセイの苦痛を現わす様にブルブルと震えていた。
おセイの後口の開発に執念を燃やす篤馬により数時間前から責め上げられていたのだった。
二本の淫具を呑み込んだ肛孔は小判の様な形に広がり、隙間から赤黒い内部が見えていた。
二本の張型を鷲掴みにしてグリグリと抉じようとしたが、肛門の筋肉がきつく噛み締め、容易に動かない状態であった。
篤馬は注意深く筒具を操作し、その内の一本を抜き出した。
長い間内側から押し広げられていた肛孔は、すぐさま閉じる機能を喪失しており、一本の張型を腸内に残したまま、薄っすらとその孔を開いていた。
辺りに腸内の芳香が立ち昇った。
普通の生活をおくっていたら、生涯人目に晒すことは無いであろう腸内の有様とその直前に存在する恥ずかしい縦割れを見詰められて、流石の男勝りのおセイも羞恥に咽び泣いた。
じっくりとその様子を確認した後、長時間に渡り二本の張型を食い絞めていたため長円形に開いた尻穴の隙間に手にした野太い張型をねじ込み始めた。
後口を襲う新たな激痛に、「アアーッ！痛い！もうお許しください！」と、悲痛な叫び声を上げた。
おセイの悲鳴も関わらず、額に汗を浮かべその部分を一心に睨み付けながら新たな埋没作業に没頭する篤馬であった。
篤馬の操作する太い責め具が肛門の筋肉を押し広げジワジワと埋没して行った。
僅かに推し進める度に、アッ！アッ！と呻き声が上がり、尻を悶えさせた。
「おお！やはりおセイのケツメドは大したものじゃ！とうとうこの太い張型を根元まで呑み込んだでは無いか！」

挿入作業を完了して嬉しそうに大声を上げた。
以前から在った細めの張型と新たに挿入した太い張型により、おセイの肛門は皺も残さず張り詰め、おにぎりの形のように変形していた。
「おや？こちらの方も何か食べたいと申しておるではないか？」
肛門を押し開く激痛は、いつの間にか単なる苦痛だけでなく何やら怪しげな感情を惑乱するおセイにもたらし始めていた。
篤馬は、尻をブルブルと震わせるおセイの少し下の部分の変化に気付いた。
剃毛され隠す物の無い淫裂から甘美な汁が滲み出ていた。
「おお！これは拙者も失礼な事をした。おセイの尻穴が余りに良いので肝心な女の穴の方を忘れておったわ！」
と、笑い上げると、抜き取ったばかりのまだ体の温もりが残る張型を手にして、ズブズブと押し込み始めた。
前後の快楽のツボを犯す淫具におセイは耐えられぬ様に声を上げ身悶えた。
雌芯から一本、肛口から二本の張型をまるで角の様に突き出したまま、恥も慎みも忘れて堪え切れず尻を激しく舞わせるおセイの姿を惚れ惚れと見上げながら、「こうして、舞台の上で、前に一本後ろに二本の張型を突き立てたら観客は度肝を抜かれる事であろう・」と、笑い上げた。
女達の過酷な肉体調教が続く傍らで、ジェームスを歓待するための準備が進められた。
全裸で手に扇を持っただけで舞を踊る志乃達の姿を玄斎達が舌なめずりして眺めていた。
優雅に体を動かす度に、たわわに実った乳房が揺れ、剃毛された秘部が見え隠れしていた。
「この様な裸の舞姿を舞台で見せれば大受けする事であろう！」
「へえ、さいどすなぁ。次の舞台での公演にいれてみまひょ。」

その夜、志乃とおシズとお福が密かに牢から連れ出された。
異変に気付いた千鶴が、「志乃様！」と、大きな声を上げた。
次の出し物に備え特訓中であった慎之介もお藤もおセイも自分の肉体的苦痛を忘れて肉親の名を呼んだ。
このまま永遠に分かれてしまうのでは無いだろうかと不吉な考えが過ぎり、涙を浮かべて互いの名を呼び合った。
三つの長持ちに入れられ三人の女は、深夜恵比寿屋の屋敷から密かに運び出された。

長い道中の末、長持ちの蓋が開かれたのは、とある海岸であった。
暗い長持ちの中に長時間閉じ込められていたため、持ち上げられた蓋の隙間から差し込む朝日に目を焼かれた。
浜には既に船が用意されており、不気味な風体の男達が待ち受けていた。
日に焼けた精悍な顔をした四十位の男が、次々と男達に指示を送っていた。
この男は清蔵と言い、恵比寿屋の密貿易を一手に引き受けている、普段は店に顔を出さない陰の番頭であった。
男達は長持ちの中から、後ろ手に縛られた志乃達を担ぎ上げ船に載せようとした。
ただこの時、志乃達が幸いであったのは、着物を着ることが許されており、髪も綺麗に整えられ華美な簪や鼈甲の櫛等が挿され、若い女らしい華やかさを演出していた。
久しぶりに袖を通す豪奢な振袖に、久しぶりに人に帰った様な気分に陥った。

「お前たちが、これから向かうのはあの島だ。」と、清蔵が沖に見える島を指さした。
惣右衛門は沖に浮かぶ島を藩から借り受け、其処に密かに外国の大型船を受け入れられる港を造って密貿易の基地としていたのだった。
志乃達三人の女を載せた船が沖に向かって漕ぎ出した。
船は三丁櫓の大型の猪牙舟で三人の水手（かこ）の他に清蔵と何人かの人相の悪い男達が乗り合わせていた。
船はそれなりの大きさがあったが、積み込まれた荷物や、如何にも気性の荒そうな男達や、水手により脚を伸ばす隙も無いほど犇めいていた。
船に乗り合わせた、陽に焼けた褌一丁の男達やその上に申し訳程度に薄い半纏を纏っただけの男達が、物珍しそうに着飾った志乃達を無遠慮に見詰めた。
船が島に近づく間に、一艘の小さな手漕ぎ船がこちらに近づいてくるのが見えた。
そして、同じような舟があちこちから現れ、何隻もの舟が一つに集まり、志乃達を載せた舟を妨害するように止まった。
その舟の舳（とも）で櫓を漕ぐ人の姿を見て、志乃は言葉を失った。
それは紛れもなく女ではあったが、志乃の思い描く女とは余りにも懸け離れていた。
一切の服と呼べるような物は身に着けておらず、大きな胸は丸出しで、腰にはサイジと呼ばれる小さな三角形の布に紐を付けただけの褌の様な物を纏い、辛うじて女の秘所を隠すだけであった。

全身は赤銅色に日焼けし、化粧っけはまるで無く髪を無造作に頭の上にからげた姿は、これが日ノ本の国の女かと目を疑った。
猪牙舟の男達の野卑な目に裸身を晒しても少しも恥じる様子も無く、綺麗に着飾った志乃達を憎さげに見詰めていた。
「全くこんな真っ黒で色気の無い汐臭い女を何時も抱いていたら、毛唐じゃなくても嫌になるぜ！慎ましやかな武家の娘を抱きたいと言う気持ちも判るぜ！」
清蔵が取り囲む女達を見まわし、心の中で呟いた。
志乃達を載せた舟を取り囲み進路を妨害している女達は、この辺の海域で潜水漁をしている女達であったが、たまに船が入ると水夫たちに身体を売っていたのだった。
その方が海に潜るより安全で見入りの良い仕事だったからである。
それに、成人の男も少ないこの地域では、子孫を残し性欲も満たせる一石二鳥の美味しい商売であり、志乃達の姿を見て自分達の商売を邪魔しに来たと直感して集団で阻止しに来たのだった。
「お前達！獲れたサザエやアワビは幾らでも買ってやるから、暫くは海に潜ってろ！」と、清蔵が立ち上がって、取り囲む船の女達に凄みを利かせた。
女達は清蔵の恐ろしさを良く知っており、この島を牛耳る清蔵に言われては仕方ないと、不満げな表情を浮かべて不承不承離れて行った。
「へへ・・姐チャン、一晩幾らだい？安ければ買ってやるぜ！」と、ならず者風の男が、比較的若くてピチピチした女を揶揄(からか)ったが、どうせ金など払う気は無いのだろうとプイッと無視して去って行ってしまった。

舟が漕ぎ進むうちに島はどんどん大きくなって来た。
本土側から見えない島の外海側に回ると、岬が海に突き出し、入り江を造り、天然の良港を形成していた。
その入り江の中には、これまで見たことも無い大きさの黒塗りの帆船が停泊していた。
志乃達はその船の巨大さに目を見張った。
日本の千石船の二倍位の長さで、帆柱一本の和船と違い何本もの帆柱を持っていた。
志乃達を載せた猪牙舟が近づいて来るのを見つけた船乗り達が、その中に美しい女が居ることに気付いて、船縁(ふなべり)に集まって歓声を上げたり、指笛を鳴らしたり、船端を叩いて大騒ぎを始めた。

その騒ぎに、志乃達が顔を上げると、真っ赤に陽に焼けた男達が、船縁に集まって何やら大声で叫びながら見下ろしているのが分かった。
その姿を見て志乃達はゾッとした。長く伸び放題の髪や髭、天狗のように高い鼻、奥まった眼－それは志乃達が初めて見る異国人達だった！

異国船の傍を通り過ぎて、浜に向かった。
浜からは桟橋が長く伸びていて其処に接岸した。
男達は志乃達に降りるよう命じると、舫を繋いだり、舟に積み込まれていた荷物を下ろしたり、桟橋に積み置かれた荷物を人や物が抜けて開いた空間に積み込んだり忙しく働いていた。
清蔵に急かれるままに浜に上陸すると、其処には恐らく異国船から降ろされたと思われる訳の分からぬ文字を記された箱や荷物と、これから積み込まれると思われる資材がうず高く積み上げられていた。
これらの密貿易品が恵比寿屋の繁栄を支えていると理解した。
浜から少し上がった、防風の松が植えられた高台には何件かの瓦葺の家が立ち並び、その中央には一際大きな二階建ての館が建てられていた。
清蔵は志乃達をその大きな館に連れ込んだ。
建物の中に一歩踏み入れると、日本風の建物の外観に関わらず内部は随分と異なると感じ周囲を見回した。
上がり框や畳の敷かれた部屋は見当たらず、床一面磨き上げられた白い石で敷き詰められていた。
奥には中国人や紅毛人等の異国人が集まっており談笑していた。
その中でも一際背の高い、子供の頃に絵で見たことのある甲比丹（カピタン）風の服を着た男がおり、志乃はこの男が異国人の一団の首領では無いかと想像した。

“Hi ! James!”
清蔵がその中の男に気付いて手を振って大きな声を上げた。
“Hi! Sayjo! How are you?”
志乃が首領と思った長髪髭面の男が、清蔵の方を振り返って、満面に笑みを浮かべて声を上げた。
二人は腕を広げて近づくと、互いにがっしりと抱き合い、後ろに回した手で相手の背をポン

ポンと叩いた。
志乃には、男同士が笑い合いながら抱き合う姿に奇異なものを感じた。
ジェームスの視線が背後に控える女達に向かった事に気付いた清蔵は、三人を紹介した。
“I show Samurai daughters you asked. Lady Shizu, Lady Fuku, and Lady Shino. Do you like ‘em?”
豪華な打掛姿の志乃と華やかな振袖姿のお福とおシズを上から下まで見まわすと、満面の笑みを浮かべて、
“Yes! Of course! They are so beautiful!”と、大きな声を上げた。
そして、「タイヘン　キレイデスネ！」と、片言の日本語を発し、片目を瞑って見せた。

三人は清蔵に促され建物の二階に上がった。其処は畳の敷かれた日本風の大広間となっていた。花鳥風月の絵をあしらった上座に向かってコの字型に椅子が配置され宴会の用意は既に整えられている様であった。
隅の方で先乗りした桃花達が座って楽器の調整をしていた。

清蔵が問わず語りに話した事や、その後桃花達から聞き取った、清蔵の身の上について総合すると、彼は元々土佐の方の鯨漁師であったらしい。
ある日巨大な背美鯨を発見し、首尾良く一番銛を突き立てたものの鯨が暴れ出し、乗っていた舟は転覆し、銛が刺さったまま沖に引き摺られ、鯨が息絶えた時には何処か判らない島影も見えない沖に来ていた。必死に船縁にしがみ付いていた男達は死を覚悟したが、偶然通りかけたアメリカの捕鯨船に救助された。厳重に鎖国政策が行われていた当時の日本では、このまま帰国しても重い罰を受けるか下手すれば死罪になり兼ねない。
そこで、帰国を諦め水夫として働き、色々な舟を渡り歩いている間にジェームスに巡り合った。
日本との貿易を熱望していたジェームスは、これまで外国船が本土に近づくと大砲で威嚇するという強硬政策が軟化したのを機に積極的に貿易の機会を模索していた。
そして、同じく外国船との密貿易で巨利を得ようと考えていた恵比寿屋惣右衛門と互いの利害が一致し、自然と結びつくことになった。
清蔵はそのまま恵比寿屋に雇われ密貿易担当の陰の番頭となった。
彼の英語は、色々な水夫から教えられた、訛りや俗語の混じった英語であり、彼自身正しい

かどうかは判らないようであるが、兎に角、商談には普通に使えていると言っている。
また荒くれ水夫達の間で揉まれて、その間に人を殺したことは一度や二度では無いと凄むのであった。

宴席には異国船に乗っていた主だった男達が着席しており、目の前の卓に並べられた酒や料理を頬張り、愉快な声を上げ笑い合っていた。
背後の襖が開いて志乃達三人が正装した姿を現すと、男達は楚々とした美女の風貌に魅せられ、大声を上げて歓迎した。
訳の分からぬ言葉で喚き合う異様な風貌の男達を見ると、異国人は肉を食らう習慣があると知っていたので、このまま自分達は食われてしまうような恐怖を覚えた。
三人がコの字型に並べられた宴席の中央に位置すると、お囃子の女達が三味線や笛を鳴らして演奏を始めた。
志乃達は桃花の長唄に併せて扇を広げて華麗な舞を舞った。
普段は下卑た男達の目の前で全裸で珍芸を披露している事を思えば、異国人の前とは言え着物に袖を通して優雅な舞を演じられる事がどれほど幸せかと思った。
桃花の朗々と歌い上げる長唄や清元に併せて何番も舞を舞った。
宴もたけなわになり男達も美女の舞を楽しみながら豪快に酒を煽り続けた。
酒宴が盛り上がるにつれ、女達の舞も優雅なものから世俗的なものになって行った。
‘金毘羅船々‘の軽快なリズムに興に乗った男達が何人も踊りの輪に飛び入りして身体をくねらせた。
その男達の珍妙な踊りにドッと笑い声が上がった。
この頃には酩酊した男達の女達を見る目が変わっていた。
最初の頃の日本の美女を愛(め)でる目から、ドロッと濁った女体を求める獣の目に変わっていた。
一人が席から立ち上がって女の着物を掴むと、あちこちで一斉に女に群がった。
野獣と化した男達に襲われ悲鳴が上がった。
帯の端を掴んで思い切り引き絞られたので、女達の身体が独楽のようにクルクルと回った。
そして、倒れた女の上に馬乗りになって胸前を広げた。
多数の紐や何重もの重ね着に苦労しながらも、今や獣欲に支配された男達は鼻息を荒げて群がり力ずくで衣服を剥ぎ取り、前を広げた。
肌襦袢の襟を広げられ、たわわな乳房が露出した瞬間、驚喜の声が上がり左右から太い腕が

伸びてその柔らかな乳房を鷲掴みにした。
腰巻を乱暴に剥ぎ取り、その秘められた股間部分が露わとなった時、”Goddamn!”と、忌々し気な怒鳴り声が上がった。
その姿にジェームスが狂ったように笑いだした。
何と女達の股間には以前ジェームスが惣右衛門に贈った貞操帯が取り付けられていたのだった。
秘部をすっぽりと覆う鏡のように磨かれた真鍮板に自分の顔が映り、男達は怒りを露わにした。
ジェームスの贈った貞操帯は一つだけであったが、惣右衛門は馴染みの四ツ目屋（江戸時代のアダルトショップの様なもの）を使って、それぞれの女を採寸し、体形に合わせた精巧な模造品を作らせ、装着させていたのである。
“On the new business condition, give you the keys.”
清蔵がニヤニヤ笑って貞操帯のカギをチャラチャラさせた。
“Mother fucker! “
楽しみに水を差された男達が憎憎しげ気に清蔵のチラつかせる鍵を見詰めた。
“Will you accept the new trading contract? “
清蔵は荒くれ男達の怒気にも怯まず、薄ら笑いを続けながらジェームスに向かって言った。
“Sayjo! You, Buster! …OK,OK, I will.”
女達を出しに使って、懸案だった恵比寿屋に有利な条件での取引契約を迫る清蔵の商魂の逞しさに呆れたように言った。
“Thank you very much!”
と、快哉の笑みを浮かべると、志乃達の貞操帯を固定していた鍵を差し出した。
ひったくる様に鍵を受け取った男達はガツガツと鍵穴に差し込み貞操帯を解いた。
“Oh! What a beautiful pussy!”
“No hair!”
男達は露出した剃毛され隠す物の無い秘奥に歓声を上げた。
“Well, now I offer special thanks for you. Those girls play instruments, no chastity belts!”
清蔵がお囃子を演奏していた桃花達を指さして笑って告げた。
志乃達を襲う輪から外れた男達が歓声を上げて桃花達に襲い掛かった。
飢えた男達に組み敷かれ悲鳴が上がった。

華やかだった宴会場は酒池肉林の様相を呈していた。
女に飢えていた男達は溜まりに溜まった性欲を吐き出そうとするかの様に乱暴に突き立て激しく腰を振った。
巨体の異国人に蹂躙され悲鳴を上げる小柄な日本女性の口をこじ開け、我慢の限度を超えて大きく膨張したモノをねじ込んだ。
外人の太くて長い男根を下にも上にも無理やり突き立てられ、女達は呻吟し身悶え続けた。
こうして、ジェームス一行を接待する長くて濃厚な一日目の夜は過ぎて行った。

初日は比較的紳士的（？）であった男達も二日目は男の欲望を丸出しにして来た。
男達の取り囲む前で女達は全裸で舞を踊らされていた。
優雅な舞で身体をくねらせる度に白い豊満な乳房が蠱惑的に揺れ動いた。
その透き通るような肌の若い美女の醸し出す肉感的・官能的な舞姿に男達は釘付けとなっていた。
女達を取り囲むように配置されたテーブルに置かれた酒を酌み交わしながら、男達は全裸で舞い続ける志乃達に卑猥なヤジを投げ続けた。
お囃子の桃花達も全裸にされ、楽器を演奏する女達の背後から男達が有り余った精力を注ぎ込んでいた。
男達の膝の上に跨り、背後から抱きしめられ、乳房を揉み上げられ、うなじにキスの雨を降らされても、三味線を弾き清元を朗々と謡い上げていた。
“How tender should we treat the ladies?”
ジェームスが傍らにいた清蔵に尋ねた。
ジェームスの質問に清蔵は冷たい笑みを浮かべると
“You can do anything except killing.”
と、サラッと答えた。
その二人のやり取りを耳にしていた酒に酔って禿げ上がった額まで真っ赤にした男が、
“It’s great!”
と、嬉しそうに大声を上げて立ち上がった。
男は扇を手に優美な舞を踊る志乃をいきなり畳の上に突き伏せると、履いていたズボンをズリ下げいきり立った男のモノをズルリと取り出した。

“Suck!”
畳の上に蹲る志乃の鼻先に隆起した男根を突きつけながら、再び ”Suck!” と、命じた。
志乃には、男の言葉は判らなかったが、状況から男が咥(くわ)えろと命じていることが理解出来た。
その男のモノは玄斎のモノとも篤馬のモノとも違う、異臭を発していた。
今にも殴り掛かりそうな男の剣幕に怯えて、目を硬く瞑って熱気を孕む肉塊に唇を押し当てた。
ツーンと鼻を衝く異国の男の性臭が志乃の脳天を貫き、不可思議な妖しい世界に志乃の心を誘った。淫靡な陶酔感にも似た甘美な刺激に脳は麻痺し、無意識の内に口唇と舌はお銀から調教された男を歓喜させる技を発揮させ始めていた。
口腔一杯に男のモノを頬張り舌先や舌全体を駆使して奉仕する志乃に、男は込み上げる性感に身体を震わせながら、”She is soooo greeeeeeat! It’s much much better than Hong Kong’s hoooookers!” と、感極まって大声を張り上げた。
お銀により鍛えられた絶妙な口技により、たちまち絶頂に追い上げられた男は志乃の口中に夥(おびただ)しい精液をぶちまけた。
犬のように四つん這いになったまま、男が口中に残したものを咽を鳴らして美味しそうに呑み込み、舌を使って丁寧に後始末する志乃の姿を男達は唖然とした眼で見詰めていた。
男の突然の乱入でお囃子も停止し、踊りの手を止めて呆然と立ちすくむお福とシズであった。
赤毛の蓬髪の男がのそっと立ち上がるとおシズを押し倒した。
そして、ズボンを降ろして下半身を丸出しにすると犬のように四つん這いの姿勢となり、毛深い尻をおシズに向けた。
恐怖に震えるおシズの目の前に、赤い毛で周囲を覆われた醜い肛門が突き出されていた。
“Lick!”
しこたま酒に酔った男が汚い尻をおシズの顔面に押し当てる様にしながら笑い声を上げて命じた。
取り囲む男達も酒瓶からラッパ飲みをしながら歓声を上げ続けた。
排便後の拭き取りも充分でなく、肛門の皺や周囲の毛に残滓を付着させた、異様な臭いを放つ汚れた所を見せつけられ、おぞましさと恐怖に怯え、涙を溢しながらイヤイヤと首を振った。
一人の男が先が何本にも分れた革製の鞭を手渡した。
赤毛男はおシズに不服従の罪がどれほど重いか思い知らすために、鞭を振りかぶった。

激しい音を立てておシズの背中の上で鞭が跳ねた。雪のように真っ白な肌がたちまち赤く変色を始めた。
突然の鞭打ちの激痛に泣き叫んだ。
おシズの悲鳴も気にせず男は今度はおシズの丸い尻を狙って鞭を振り下ろした。
切り裂くような鞭音と共におシズの甲高い悲鳴が響いた。
男はその後何度も全身が赤く染まるまで鞭で少女の身体を打ち据えた。
鞭打ちに疲れたのかハアハアと息を吐きながら、再び“Lick!”と命じて尻をおシズの方に向けた。
おシズは鞭打ちの恐怖に屈して、顔をその男の不潔な部分に向けると舌を伸ばして、皺が集中する中心に押し当てた。
“Oooh! It‘s good! It’s sooooo gooooood!”
赤毛男はおシズに嘗められる快感に声を震わせた。
志乃は、涙に咽びながら男の肛門に舌を這わせるおシズを見詰めながら、以前杉作達から暴行されそうになって、恐怖心から記憶を失ってしまった様な内気で気の弱い娘であるから、このままではおシズの心は壊れてしまうのでは無いかと心配した。

“Now all guys have finished lunch. So, let’s enjoy something!”
突然清蔵が立ち上がって男達に呼び掛けた。
手にしたガラス浣腸器を高く差上げて示したので、清蔵の企(たくら)みを理解した男達からどっと笑い声が上がった。
桃花達を含め六名の裸の女達が館から外に引き出されて来た。
建物の中で浣腸した結果としての臭気や汚れを考えて、海岸の砂浜で行おうと決めたのであった。
建屋の外には、今回のお楽しみに加えて貰えなかった下級水夫や恵比寿屋で働く男達、そして海に潜って獲って来た蝦や貝類を売りに来た昨日海の上で会った海女達が居た。
六名の女達はそれらの人々の無遠慮に眺める目を恥じて、手で胸と股間を隠して身体を小さく折り曲げモジモジと身体を蠢かせていた。
清蔵が竹棒で立ち竦む女達の背中や尻を突いて、砂浜への歩行を促した。
館の外にいた男達や偶々(たまたま)居合わせた海女達も興味深げに全裸の女達の行列の後をゾロゾロと追った。

清蔵は哀れな女達を波打ち際まで連れて来ると立ち止まらせた。
硝子浣腸器を波の中に沈め海水を満たしながら、
“The girl first blows up, 25 whips penalty, and second one 10 whips penalty. How do you think?”
と、取り囲む男達を見まわしながら言うと、”
“Excellent idea!”と口々に歓声が上がった。
“But, cylinder is only one! And girls are six! Injecting water into one girl somehow takes time. Between the first girl and the last girl should be need long duration. It’s not equal condition!”
どの女が優勝するか、そしてどの女が我慢しきれず最初に漏らすかを掛けの対象にしようと目論んでいた男が、一本しか無い浣腸器で６人に浣腸しようとしたら、最初の女から始めて最後の女が浣腸し終わるまでに可成り時間が経過してしまって公平では無いと口にした。
“Right! right. So, how can I solve the question….”
と、頭に手を当て思案するそぶりをしたが、ふと顔を上げて陰惨な笑いを浮かべると、
“Well, how about the idea of deciding the enema order in a tug-of-war?”
女達に綱引きをさせて浣腸する順番を決めたらどうかと問い掛けた。
“A tug-of-war?” 男達が頓狂な声を上げた。
“Yes! Insert a lope into two girls’ pussies and pulling each other.”
女性器を使っての綱引きという清蔵の提案に笑い声が巻き起こった。
早速ロープを一尋（約 1.5 メートル）程に切って用意が出来た。
帆船では色々なロープが使われる。その中で一番細いロープが選ばれたが、それでも普段女達を縛る麻縄よりずっと太い物であった。毛羽だったマニラ麻のロープの両端を結んで大きな瘤が作られた。
三本のロープが作られ、六人の女が二人ずつ三組となって砂浜に互いに尻を向けて四つん這いの姿勢を取らされた。
互いの女の中央の砂地に中間線が引かれた。
男達は笑いながら大きな瘤になった縄の端を肉洞に無理やり埋め込んだ。
ざらついた縄目と大きな瘤が侵入する掻痒感に思わず呻き声が上がった。
堪え性の無いお福は身体をくねらせヒィヒィと悲鳴を上げた。
赤毛男による凌辱の衝撃の大きさに精神が崩壊し始めたのかおシズは焦点の定まらない目をして、じっと男達の狼藉を受けていた。
そんな女達の様子にも気を配る事無く縄をなおも押し込み、体内に４インチ（約 10 センチ

メートル）程埋め込んだ。
犬のように四つん這いになり、互いに尻を向けた形の二人の女の股間からはだらりと垂れ下がったロープで繋がっていた。
水夫や恵比寿屋の使用人や海女も交じって遠巻きに人垣を作り、物珍しそうに彼らの様子を見詰めていた。
“Ready!”
審判役を買って出た金髪の蓬髪の男が右手を上げて大声を発した。
「いいか？レディの号令で下腹に力を込めて胎の中の縄を食い絞めるんだ！そしてゴーの合図で思い切り引くんだぞ！」
清蔵は女達が外国人の言っている言葉の意味が理解できないと思い、砂の上に這いつくばる女達に指示した。
“Go!”
男が大声を上げて振り上げた右手をサッと降ろした。
股間にグッと力を込め、四つん這いのまま前ににじり出た。
女同士の尻の間から優美な懸垂線を描いて垂れていたロープがピーンと張った。
その瞬間其処此処でアッとかウッとか女達の口から呻き声が上がった。膣内に収めた瘤が表に引きずり出されようとして、表面の毛羽立ちが華洞の内壁を擦ったためだった。

既に精神が崩壊し始め、虚ろな表情を浮かべるおシズが簡単にロープを引き抜かれてしまった。次に堪え性の無いお福が股間からロープを引きずり出された。
お銀によりその部分を鍛えられ強い緊縮力を持つ志乃はあっさりと勝利をおさめた。
女達は相手を代えて、次なる試合に臨ませられた。
こうして総当たり制で浣腸の順番を決める為の淫猥な女同士の綱引きは進んで行った。
毛羽だった太いマニラ麻のロープを其処の筋肉を絞って締め付けるという経験は、これまでの調教に無かった事なので、女達はその苦痛に満ちた異様な刺激に悲鳴を発し身悶え続けた。
砂浜には自らの女性器を武器に汗みどろの戦いを繰り広げる女達の嬌声が響き続けていた。
死闘を繰り広げる女達を取り囲んだ観衆からも熱い声援が飛んだ。
志乃の強敵は意外にも三味線引きの桃花であった。
これまで数々の男を咥え込みキリキリ舞いさせて来た桃花の膣の締め付けは驚異的なものがあった。

無敗同士の二人は最終戦で戦う事になった。
既に他の二組の勝敗は決していたが、志乃と桃花の試合はまだ続いていた。
互いにがっちりとその部分に太い縄を咥え込み容易に縄を離そうとはしなかった。
二人の背中はびっしょりと汗で塗れ、苦悶に眉を顰める額からは汗の雫がポタポタと落ちていた。
遠巻きに女同士の死闘を眺めていた観衆も今は一騎打ちとなった志乃と桃花を間近に取り囲み、女性器を駆使した真剣勝負に引き込まれ、伸ばせば手の触れそうな場所から熱い声援を送った。
昼前から始められた淫蕩な女同士の勝負も既に陽は中天を過ぎ傾き始めていた。

優勝すれば何かの特典が与えられる訳では無かったが、女陰を酷使した試合を重ね、人々の嘲笑やヤジを受け続ける内に、二人の正常な意識は遠のき、頭の中は真っ白になりながら何かに突き動かされるように自らの女肉を駆使して淫靡な綱引きを続けていた。
四つん這いの姿勢のまま桃花がジリジリと前に進んだ。
ピンと張った縄の端を咥える志乃の身体の奥からズルズルと縄が引きずり出されて行くのが見えた。志乃の身体の中に潜っていたロープの表面が濃厚な樹液に塗されテラテラと光っていた。
堪らず桃花の力に引かれてジリジリと後退し始めた。
志乃の四つん這いの脚先が二人の間に引かれた中間線を越えつつあった。
試合のルールでは縄を咥えた尻が中間線を越えれば、勝敗の決定となっていたので、後僅かで志乃の尻が超えそうな状況に、二人を取り囲む観衆から割れんばかりの歓声が上がった。
後僅かで決着が着きそうな状態まで進んだが、ここで桃花の持久力が限界に達した。
桃花の牽引力が減衰し始めたことを感じた志乃が股間をグッと締め付け、逆に前に進み始めた。
桃花としてもここで無理に引っ張ればロープが女陰から抜け出てしまう事を恐れ、無理な抵抗を止めて身体を休めた。
今度は志乃が桃花を引き始め、中間線を越えて勝負が着こうという状況に割れんばかりの声援と拍手が巻き起こった。
眉根に深く皺を寄せ、開いた口からは涎と共に熱い息を吐く志乃にとってもそれが限界であった。

勝負は再び膠着状態となった。
互いに太いロープを淫孔に収め、汗と淫液に塗れながら引き合う陰惨な姿に観衆は時が経つのも忘れ熱い声援を送り続けた。
長い格闘の末に、二人の淫孔に深々と埋め込まれていたロープはほとんど引きずり出され、淫水に濡れてシミを作った部分によりどれほどの長さが女陰の中に埋没していたのか明らかとなった。二人が辛うじて咥えているのはロープの端に作られた大きな結び球だけであった。
二人とも既に正常な意識は既に失われていたが、何かに突き動かされるように、互いに白目を剥き、歯を食いしばって、最後の縄の端を締め続けた。
荒くれたロープが内側から膣孔を掻き毟る刺激は女達に不思議な感覚を与えていた。それは苦痛を伴った怪しげな、或る意味甘美な刺激となって脳髄に込み上げていた。
ロープを咥え込んだ雌穴から夥しい愛液が噴き出し、観衆に対して剥き出しとなった秘園を濡らしていた。
志乃の剃毛され、まざまざと晒された秘密の花園の周囲も桃花の艶やかな春草で覆われた周辺も湧き出した樹液に塗れ、陽の光をテラテラと反射していた。
二人とも体力の限界を迎えている事は明らかであった。
見守る観衆も後はどちらが先に絶頂を迎えるかで勝負が決まると確信した。
観衆の二人を励ます声が一層激しくなった。
互いに汗まみれになり下腹をブルブル震わせながら、志乃が最後の力で引いて出た。
その刹那、まるで絶息するような声を上げて桃花の身体が前に崩れた。
桃花の中心部から夥しい愛液と共に瘤が飛び出し宙に舞った。
志乃も股間にロープを咥え込んだまま叫び声を上げて前に倒れ込んだ。
砂浜にうつ伏せになったまま、ピクピクと身体を痙攣させる二人をつめたく見下ろしながら、“Now! All the orders are determined!”これで順番は決まったぜ―と、清蔵が冷たく宣告した。

順位は、一位が志乃、二位が桃花、以下梅香、お福、藤花であり最下位は精神に異常を来しつつあるおシズであった。
この試合を賭けの対象としていて、見事当りを得た水夫が大声を上げて喜び、外れた男達が悔しそうな顔をした。
“So, the first cylinder shot is Shino, the second is Momoka, and the last injection is Shino!”

清蔵が浣腸の順番を宣言した。
優勝した志乃が一番最初に浣腸の洗礼を受け、最下位のおシズが一番最後と聞いて観衆から意外な声が上がった。
この観衆の反応に対しては落ち着き払って説明を始めた。
“The muscle of the pussy and the muscle of the anus are linked to each other. So, the girl has strong pussy must have strong anus. It’s supposed to endure the water pressure from internal guts and keep long time. I believe it is an adequate handy cap. How do you think?”
膣の筋肉と肛門の筋肉は繋がっており、膣の筋肉が強ければ肛門の筋肉も強いことが予想され、それなら浣腸にも長時間耐えることが出来るだろう―と、解説した。
この説明に浣腸の結果を賭けの対象にしようと考えていた男達から、
“You are genus! Yes, it’s a proper handy cap!”
それは、良いハンディだと歓声が上がった。

樽一杯に海水が汲み上げられ、ガラス浣腸器の中に吸い上げられた。
たっぷりと海水で満たされた浣腸器の嘴管が志乃の剥き出しの菊花に突き立てられた。
波打ち際に両手両足を着き、尻を清蔵に向けて高々と突き出した姿勢の志乃がウッと呻き声を発し両手で砂を握り締めた。
「エネマは初めてじゃ無いって聞いているぜ、もっとも海の水を注がれるのは初めてかも知れないがね・・」
志乃の苦悶の表情を冷たく見下ろしながら、身体の内部から突き返す抵抗の圧力を楽しむようにピストンを押し進めた。
一人の船員が淫欲に燃える目で清蔵から浣腸器を奪う様に手にすると、鼻息を荒げ、劣情を燃え立たせ、目をランランと光らせながら海水を浣腸器一杯に吸い上げ、志乃の隣で尻を擡げる桃花の排泄口に突き立てた。
その乱暴な動作に桃花の口から悲鳴が上がった。
こうして次々と劣情に燃える男達から腸内深く海水が女達の腹の中に注ぎ込まれて行った。
女達は綱引きの順位通りに波打ち際に横一列に並ばされ、四つん這いの姿勢のまま尻を海に向けて突き出していた。
海水は成分が体内の水分と近いためグリセリンの様に直ぐに排泄衝動が起きることは無かった。こうして女達の間を一巡して再び志乃に順番が回って来た。

二度目の海水を注ぎ込まれて腹が内部から膨らんで行くのが感じられた。
女達の間で二度目の注入が終わるころから志乃の腸内に変化の兆しが現れ始めた。腸の内部から襲う膨満感が排泄の衝動に変化し始めたのだった。
三度目の注入を受けながら、腸を押し広げる圧力と込み上がり始めた排泄衝動に呻き声を上げた。
波打ち際に横一列に女達が並んだまま三度目の浣腸が進んでいた。
浣腸の順番が中程まで進んだ頃、観衆の間から大声が上がった。
先程から焦点の定まらない痴呆のような表情を浮かべていたおシズの後口を割って突然放出が始まったのだった。
天に向かって高く擡げられた肛口から注ぎ込まれた海水と共に褐色の便塊が青空と海原に向かって放物線を描いて放出された。
満ち始めた海の水が落下して来る固形物で飛沫が上がった。
夥しい汚物を放出しながらおシズの口から笑い声とも叫び声ともつかない奇妙な声が上がっていた。
打ち寄せる波と引く波が、生まれたての茶色の固体を波打ち際で押したり戻したり遊ぶように転がしていたが、やがて沖に運び去ってしまった。
おシズが最下位に決定したことにより賭けに負けた男が頭を抱えて喚き声を発した。
脱落したおシズを除いて三度目の浣腸が進んでいた。
志乃が四度目の浣腸を受ける頃、藤花が堪らず放出を始め、つられる様に梅花も堪えていた堰を切った。大量の海水により腸内の内容物をドロドロに溶かした汚物は、飛沫となって狭い噴出口から吹き出し、折からの海から陸に向かって吹いた風に押し戻され二人の白い尻を茶色く汚した。
こうして更に藤花と梅花が脱落し賭けに負けた男が大声を上げた。
志乃のすぐ隣で暴れ狂う腸内の圧力に呻き声を上げていた桃花の四度目の浣腸が終わり、お福の順番を迎える時に、苦痛に悶え苦しんでいたお福が絶叫と共に放出を始めた。天に向かって立ち上る激しく噴き出す褐色の水流に見詰めていた男女から大きな声が上がった。
最後に志乃と桃花が残った。
清蔵は五度目の海水を注ぎ込みながら、外目にも白い腹が膨らんでいる様に窺えた。
これ以上の注入は無理と判断して暫く様子を見ることにした。
二人は脂汗を浮かべて苦痛に呻き声を上げていた。

腹の中から襲い来る激痛に身悶え、砂浜の砂を握り締め、必死にその時を堪える桃花の様子が同じく激痛に霞む志乃の目に入った。
「頑張って・・桃花さん・・・耐えるのよ！」
と、自身も狂おしい排泄の衝動に苦しめられながら呻吟する桃花を励ました。
排泄を堪えてもどうすることも無かったが、長い虐待生活の中で苦痛に耐え、限界まで堪えることが自分に課せられた義務の様に思い込まされていた。
とうとう桃花も最後の時を迎えた。
夥しい汚物が注ぎ込まれた大量の海水と共にドッと噴出して霧のように広がった。
風に煽られた飛沫が隣の志乃の尻も汚した。
桃花の噴出に遅れて志乃もとうとう堪えに堪えていた堰を切った。
激しい噴火に続いて、二人の美女が並んでドロドロと液状化した便を流し続ける様子に人々は魅入った。
こうして全ての順番が決まり、賭けに勝利した男達から歓声が上がり、負けた男達から落胆の声が上がった。
女達は海に浸けられ身体に付着した汚物を綺麗に洗い流された後、渚に浣腸の結果に従って横一列に直立させられていた。
傾き始めた陽の光が全裸のまま立ち尽くす女達の身体を赤く染めていた。
女達は両手を身体の横にピタリと付ける‘気をつけ’の姿勢で直立不動を命じられていたため手で胸や股間を隠す行為は封じられていた。
女達を取り囲む観衆たちは前から眺めたり後ろに回ったりしながら彫像のように立ち尽くす六人の女の裸体を舌なめずりしながら鑑賞した。
六人の女が横一列に並ぶと、それぞれ背の高さの違いや肉付の違いを見比べることが出来た。
顔の形や特徴はそれぞれ違っても皆美人であると感じられた。
異国人達は、日本女性の乳房の形や大きさ、乳首の色や形、乳暈の大きさ、股の付け根の丘の盛り上がり具合やその直ぐ下にまざまざと晒す割れ口の形状、後ろに回って尻の形状や尻肉の垂れ具合等を卑猥な言葉を並べ笑いながら評価し合った。
男達の下卑た目に晒され笑い者にされる羞恥に身体はブルブルと震え啜り泣きの声が漏れていた。
女が直立不動の姿勢で動けないのを良いことに、両手を添えて披裂の襞を押し開き、畳み込まれていた柔らかな襞を捲り上げ、日本女性の内部構造を間近で観察したり、尻たぶを押し

分けて隠されていた菊花を露わにしたり狼藉を働いていた。
先ほどまで大活躍し、凄まじい噴火を繰り返していた肉の火口部分も今は慎ましやかに閉じ、清楚な趣を湛える隠花の中心に指先を押し当てられ揉み上げられ、羞恥に悲鳴を上げて身悶えた。
男の手により秘奥を開帳され悲鳴を上げ身悶えさせたが、西日を横から受け開け広げられた羞恥の個所は影も作らず照らし上げられていた。
異国船員による日本女性の裸体鑑賞が一段落したのを受けて、清蔵が列の端に立たされていたおシズと藤花を列から引き離した。
二人を連れて行く砂浜の先には、上半身裸で屈強な筋肉を見せる二人の男が鞭を手に待ち受けていた。
おシズと藤花は、二人の男の足元で、鞭を当て易いように両手両足を砂地に着けて尻を高く擡げた姿勢を取らされた。
二人の男は女達の恐怖を煽る様に、先が幾つにも別れた革の鞭を空中にビュッと音をさせて振り回した。
鞭打ちの恐怖に藤花は顔を砂に押し付けたまま目を硬く閉じた。
精神に異常を来したおシズは何も分からないのかボンヤリと視線を前に向け痴呆の様な表情を浮かべていた。
その様子に志乃は、このまま２５回も鞭を受けたらおシズは死んでしまうのでは無いかと思った。
「お願いで御座います！おシズさんの罰は私が受けます！ですからおシズさんをお許しください！」と、突然叫び声を上げると並んでいた列から飛び出し、処刑人の足元にひれ伏した。
“What does she say?”
鞭を手にした男が突然飛び出して来て、おシズの横に尻を擡げた姿勢で蹲った志乃の様子にきょとんとして清蔵に問い掛けた。
“She says, please whip me instead of her and forgive her penalty”
清蔵が説明する間に桃花が列からゆっくりと進み出て、「その罰の半分は私が引き受けるよ！」と、声を上げると志乃の隣に並んで四つん這いの姿勢となった。
驚いた表情で見つめる志乃に、
「私しゃアンタに惚れたのさ！女心に女が惚れるってやつさ！初めてアンタを見た時には

武家の御姫様が私達と同じ河原者に堕とされて恥掻き芸をやらされて、いい気味って思ったもんさ！だけどね、ずっとアンタを見ていて段々と考えが変わって来たのさ！アンタは何時も人に優しくて如何に汚辱の仕打ちを受けても高貴さを失わない！そんなアンタに惚れたのさ！私しゃずっとアンタに付いて行くよ！」
と、言うと鞭を催促するように尻を高く擡げて、男の劣情を誘う様にイヤらしく振りたてた。

その夜も館は外国男性と日本女の酒池肉林の饗宴となった。
ただ、ジェームスは志乃の事が気に入ったみたいで、性に燃え狂う男女の中から志乃の手を引いて自分の部屋に連れ込んだ。ジェームスは船長特権でこの館の中に私室を持っていたのだった。
彼は志乃を乱暴にベッドの上に押し倒すと、その上に身体を重ねていった。
身体も大きく筋肉質なジェームスは、前技もそこそこに精力的に志乃の柔肉の奥に突き立てた。
最初は鼻についた異国男の体臭も激しく突き立てられ、お銀達により調教された身体が自然に開き、怪しげな桃源郷に誘い込まれる内に、性感を燃え立たせる不可思議な芳香に変わっていった。
逞しい体つき同様、男性器も巨大であり、また体力も抜群で激しく腰を動かしながら志乃に何度も絶頂を味合わせた。
何時果てるとも知れない激しい腰の運動に、堪らず悲鳴を上げたが、彼はそんな志乃の様子にも関わらず腰を振り続けた。
何時の間にか毛深い胸に顔を埋めて太い腕に抱かれて気を失っていた。
ジェームスは自分の精が涸れるまで、明け方近くまで志乃の身体を求め続けた。

次の日もそしてその次の日も女達は身に何も纏う事を許されず、昼は浜に引き出され外国人相手の淫蕩な娯楽の相手をさせられ夜は館の中で身体を嚮(ひさ)がれた。
浜に敷いた大きな板の上で全裸のまま大の字に固定され開け広げられた陰部の奥まで陽に炙られる女達を通りかかった海女達がまるで干物の様だと揶揄して笑った。
海女達の間でも責め嬲られる志乃達の事が噂に上っている様で、連日多くの女達が訪れる様になり、影も踏めなかった女達が責め嬲られる様子を薄ら笑いを浮かべて見下した目で見物しに来るようになった。

夜になるとジェームスは志乃一人だけを私室に連れ込みその柔肌を貪った。
お銀達により開発された女の器官とどんな男でも桃源郷に誘う交接術はジェームスを夢中にさせた。
ジェームスの肉欲は凄まじいものがあったが、連日抱かれる志乃には、それが玄斎父子や惣右衛門の様に残虐なものでは無いことが判り始めた。
性行為は粗野で荒々しいが、その抱擁の中には志乃に対する愛(いつく)しみのようなものが感じられた。
そして、お銀達の調教により表に引きずり出された志乃の女としての一面も、そんな男の荒々しさを希求するようになっていた。
甘美に蠢く柔らかな志乃の媚肉がジェームスのモノを奥へ奥へと誘い込み、極彩色の桃源郷へと誘った。
肉体調教で無理やり絞り出されたモノとは違う、真に愛する男に抱かれた時にだけ湧き出す濃厚で温かい愛液がジェームスの男のモノを包んだ。
何時しか志乃は要求されなくてもジェームスのモノを口中に迎え入れて真心を込めて奉仕し、もう一つの穴も提供して愛を証明した。
そんな清楚な武家の娘としての典雅な雰囲気を湛える志乃の外観からは窺い知れぬ超絶的技巧に感激し益々志乃にのめり込んで行くことになった。

鎧戸を通して朝日が寝室に差し込んでいた。
明け方近くまで激しく志乃の柔肌を求めたジェームスは、今はベッドに横たわり志乃の隣で毛布に包まり鼾(いびき)をかいて寝ていた。
そんなジェームスの寝顔を見ていると、顎下や鼻下に長い髭が渦巻き、赤く陽に焼けた顔は、冒険家や開拓者の顔に見えても悪人の顔には見えず、濃密な交接に満足したような表情を浮かべて眠る顔はどこか少年の顔のように見え、高鼾をかいて寝入る姿を見詰めてクスッと笑った。
明るさを取り戻し始めた室内を見まわすと、壁に掛けられた絵や調度に日本間とは違う異国の風情が感じられた。
ふと、ベッドの脇のテーブルの上に無造作に拳銃が置かれている事に気付いた。
あの単筒が有れば、玄斎父子を倒し敵討ちできるのでは？との思いが込み上げて来た。
剣の技や膂力においては志乃と慎之介の力では絶望的に敵わないが、もしこの単筒が有れば、

自分でも離れた所から打ち倒せるのでは無いかと思った。
志乃はジェームスが目を醒まさない様に注意しながら、テーブルの上の拳銃にそろそろと手を伸ばした。
志乃の手が拳銃に触れた時、ジェームスの大きな手が志乃の手の上にそっと重なった。
「ナニヲ・・シテイルノデスカ？」
拳銃を掴もうとしていた志乃に片言の日本語で問い掛けた。
「お願いで御座います！慈英夢須様、この単筒を暫くの間志乃にお貸下さい！」
拳銃で自分を殺そうとしたのでは無いかと疑いの目で見つめるジェームスを必死のまなざしで見上げて声を上げた。
「ハンドガンヲ・・カセ？・・ナゼデスカ？」
志乃の言葉の意味が理解できず問い掛けた。

志乃はこれまでの自分の身に降り掛かった事を涙を浮かべて話した。
自分の父を殺し、母を犯して死に追いやった仇に誘拐され自分も処女を散らされた事、仇に幽閉され連日性奴隷の扱いを受けている事。
仇の父子は二人とも剣の達人であり力も強く、自分達では到底敵わない事。もし、拳銃が有れば自分達でも仇を打つことが出来るかも知れない事などを説明した。
ジェームスの片言の日本語力ではどれだけ正しく理解されたかは怪しかったが、大筋は理解したように見えた。
但し、ジェームスの日本語の理解力が乏しかった事が幸いしたのかも知れなかった。仇の玄斎父子を殺すことは同時に惣右衛門を倒すことになり、そうすれば彼の日本相手の密貿易にも影響を与えることになり、いくら志乃に同情しても、真剣に協力しようとは考えなかったであろう。
ピストルを手にして弾が込められていないことを確認しながら、
「ソレハ・・ホントニ・・カワイソネ」
と、真に志乃に同情している様に呟いた。
「シカシ・・ハンドガンノ・・アツカイワムツカシイ・・アナタ・・イママデハンドガンウッタコトナイネ？」
これまで身に降り掛かった不幸な現実を一切吐露して、涙に咽ぶ志乃の姿を優しく見詰めながら言葉を続けた。

ジェームスの言う通り自分はこれまで銃など手に触れた事など無かった事を思い返し力無く肯いた。
「レンシュウ・・ヒツヨネ、バット、セイジョーミテイル。カレアクニン、ユダンデキナイ、レンシュウムツカシイ。ソレニ・・アイテワケンノタツジンフタリ。チカクカラ、ヒトリヲ・・カクジツニコロシ・・キラレルマエニ・・モウヒトリ・・カクジツニコロサナケレバナラナイ！ワタシデモムリ！」と、ピストルを使用しての敵討ちを諦める様に諭した。
志乃の悲嘆にくれる姿を見ながら、「サテ・・ソレデワドウスレバ・・イイカネ？」と、親身になって思い悩んだ。

女達の賭け

惣右衛門が後ろ手に縛り上げたお藤のたわわに垂れた乳房を掴み上げ、その根元を麻縄でグルグルと縛っていた。
「へへ・・色が変わってきましたで・・」
と、お藤の両の乳房の根元をきつく麻縄で縛り上げながら、今にも口の端から涎を垂らしそうに笑い声を上げた。
惣右衛門により縊り上げられ荒くれた麻縄に搾り上げられた前方にデロリと垂れた大きな両乳房は鬱血して紫色に変色し始めていた。
乳房と胸の接合部を男の力で絞め上げられる激痛にお藤がウッウッと呻き声を上げた。
そんなお藤の苦悶も気にせず、両乳房を縛り上げ長く伸びた二本の縄の端を天井の滑車から垂れた横棒に縛り付け固定した。
惣右衛門が滑車から延びた綱を引き揚げると、お藤の頭上に在った横棒が上に向かってそろそろと引き揚げられはじめ、乳房と繋がった縄がピーンと張った。
アッ！アッ！と悲鳴を上げ、乳房を根元から引っ張り上げられる激痛に耐えられず、正座していた膝を崩し、身体を起き上がらせた。
惣右衛門は、それでも綱を引き続け、とうとうお藤の身体は直立するまでになった。
乳房に括りつけられた縄に吊り上げられ、裸身を晒すお藤は後ろ手に縛られているため秘部を隠すことも出来ず、綺麗に剃毛された股間には成熟した女の柔らかな肉を置いた狭間に、婀娜っぽい亀裂がはっきりと窺えた。

「アアーッ！もうお許しください！」
乳房の根元を縛った縄に支えられただけで、拷問蔵の床に直立状態となったお藤が痛みに堪え切れず哀願の声を上げた。
「あかん！あんたの様な性悪の浮気女はこうやって罰を受けるんや！」
と、吐き出す様に口にするとなおも滑車の綱を引き続けた。
惣右衛門のお藤に対する歪な思いは、お藤を性的に苛み、身も心も徹底的に蹂躙することに喜びを求めると供に、一方では嗜虐者達により捨太郎や慎之介など色々の男達との性交を強制されて男に抱かれる時、自分には見せたことの無い喜悦の表情を浮かべている様に感じて、激しい嫉妬を覚えるのであった。
「ワテ以外の男に嬉しそうに尻を振って誘い込みおって！ホンマにアンタは助平な女や！」
と、泣き喚く様な声を上げてグイグイと綱を手繰った。
惣右衛門の理不尽な怒りにお藤は激痛に身悶えながら泣き叫ぶように詫び続けた。
二十数年間というもの自分勝手に一方的に片思いして来たお藤が、未だに自分に対して心を開いて真の女の姿を晒さない事に、言いようの無い苛立ちを覚えるのであった。
当たり前の話であるが、嫌がる相手に無理矢理性具や肉棒を突き立て一方的に肉体を貪るだけの男に女は憎しみは、持っても恋情を抱くはずは無かった。
しかし、お藤に対して歪んだ愛憎を持つ惣右衛門にはそれを理解することは出来ず、自分が恋しく思っている女は、相手も自分の事を恋しく思わなければならないと思い込んでいた。
更にグイッと綱を引くと、お藤の身体は両足の親指だけで爪先立つ形となり、全体重が自分の胸に掛かり、激痛に脂汗がどっと湧き出た。
お藤の上げる断末魔の様な悲鳴に、堪らずお銀の調教を受ける慎之介が、
「もうお止め下さい！」と、悲痛な声を発した。
「うるさい！間男はそこで自分の女が罰を受けるのを見とればええんや！」
「そうだよ、慎之介、お前は自分の次の出し物の事だけ考えていれば良いんだよ・・」
慎之介の菊花に優しい指使いで油を塗り込みながら、お銀が諭す様に言った。
抵抗しない様に高手小手に縛り上げられた慎之介はうつ向きに床に転がされ、顔と両足で身体を支える姿勢を取らされ尻を高く上に擡げていた。
お銀は先ほどから自分の方に突き出した双臀の狭間のわずかに色素を帯びた蕾を揉み解していたのだ。
肛孔の皺の一本一本にまで丁寧に油を塗り込むと、いきなりその中心に指を突き立てた。

お銀の指が腸内に没入するのを感じて、ウッと呻き声を上げて顔を顰めた。
「ほほ・・こちらの後の花も良い具合に育って来たね。柔らかく開いてまるで女のアソコの様だよ！そのくせ男の力で締め付けて来るから、玄斎旦那が夢中になる気持ちも判るね！」
指を直腸深くまで突き立て、その周囲を微妙な指捌きで責め立て慎之介を嬲り続けた。
お銀の巧妙な指技に根負けした慎之介の口からウッ、ウッ、という呻き声が上がり始め、額と悶える双臀の間に汗が滲み始めた。
「ほほ・・良い気持ちだろう？ここをこうすればどうかえ？」
と、指を二本にしてその秘められた内部を絶妙な手技で責め嬲った。
お銀が掻き立てる度にまるで電気の様な刺激が走り、脳髄を痺れさせ、その部分から熱いモノが込み上げて来て、下腹全体を覆った。
「ほほ・・よっぽど気持ちが良いんだね・・前の松茸も大きくなって来たよ！」
と、口を押えて笑った。
お銀の見守る前で慎之介の男のモノはムクムクと膨張し始め、見る見るその硬度を増していった。
「待ってな、今もっと気持ち良くして上げるからね・・」
と、口にするともう片方の掌にべっとりと油を塗し付けた。
そして、その油まみれの掌で熱く熱を帯びた怒張を握り締め、扱き始めた。
前の肉塊と後ろの肉洞の内部を同時に責め立てられ、その目眩く刺激にアー、アーと呻き声を発して腰を身悶えさせた。
自分の巧妙な手技に煽られて啜り泣きを漏らして身悶える慎之介の様子を冷静に観察しながら、「しっかりおしよ！大の男がこんな事で女みたいに鼻を鳴らしたら可笑しいよ！」と、尻をパンパンと叩いて笑った。
油まみれの掌の中で慎之介の分身がピクピクと小さく痙攣するのに気付いて、「もうイキたいんだろう？良いよ、イカせてあげるよ・・」と、ほほ笑んだ。
そして、後ろを振り返って半次郎の名を呼んだ。
お銀に呼ばれて半次郎がおセイを連れて現れた。
おセイも全裸のまま後ろ手に縛られ、全身に疲労の色をアリアリと浮かべ、力無く崩れようとするのを半次郎が後ろから支え、抱える様に連れて来た。
先程まで半次郎達から酷いいたぶりを受けていたようで、全身は赤く上気し、粘っこい汗に包まれていた。

そして、綺麗に剃毛され隠す物の無い股間からは、何と巨大な男のモノが生え出していた！
おセイは精密に男のモノを模した巨大な双頭の張型を女陰に埋め込まれていたのだった。
おセイを高く尻を擡げた姿勢で蹲る慎之介のすぐ傍に跪かせた。
慎之介の怒張を油まみれの手で扱き上げながら、「さあ！慎之介はもうイキたがっているんだよ！それで埒をあけて上げな！」と、命令した。
半次郎がおセイの体内に埋め込まれた張型のもう一端を握ると、太い亀頭の先をつい今までお銀の指を受け入れていて、薄っすらと開いたままの慎之介の肉の井戸の中心に押し当てた。
「さあ！それで一機に慎之介の後を貫(つらぬ)くんだよ！」と、激しい声を上げた。
上体を後ろから半次郎に抱えられたままのおセイは、目に涙を浮かべてイヤイヤと首を振り立てた。
業を煮やした様に半次郎がおセイの尻を後ろから押し立てた。
肉を押し開くように野太い張型が、慎之介の肛口にズブズブと沈んで行った。
肉を切り裂く痛みに、歯を食いしばって耐える慎之介の口から呻き声が上がった。
「お許しください！慎之介様！」
長時間の調教で肉体を酷使され続け、腰に力が入らぬおセイは、半次郎の男の力に押され耐えられず、慎之介を犯すことになり泣き叫ぶように詫び続けた。
半次郎に押され、淫具は見る見る慎之介の体内に没して行き、とうとう慎之介の双臀とおセイの股間が密着した。
慎之介は内部から押し広げようとする淫靡な圧力に眉根を顰めて呻き声を上げていた。
「ただ突っ込んだままじっとしてたら慎之介も嬉しくないよ！」
慎之介の怒張をせかせかと扱きながら、お銀が不満そうに声を上げた。
両手でがっしりとおセイの腰を抱えた半次郎がおセイの尻を前後に動かし始めた。
太い筒具が慎之介の肉を弾いて抜け出し、その後、周囲の肉を包み込んで姿を隠して行った。
その前後運動は慎之介にもそして双頭の張型のもう一端を肉体内部に含んだおセイにも不思議な刺激を与え、慎之介の口からもおセイの口からも同時に呻き声が上がった。
その筒具の与える刺激は、二人の心に怪しげな陶酔をもたらし、何時の間にかおセイは半次郎から強制されずとも自発的に腰を揺すぶりだしていた。
そして、慎之介もそれを迎え入れる様に尻を振り立てた。
「見よ！お前の亭主はおセイに後ろから犯されて女の様に啜り泣きを漏らしておるぞ！」
千鶴を背後から貫きながら玄斎が現われ、慎之介がおセイから与えられる甘美な刺激に耐え

られない様に鼻を鳴らす姿に笑い声を上げた。
八か月を経過した千鶴のお腹は大きくせり出し、大きく膨らんだ腹の周りで八角形の環を描く様に結んだ麻縄がまるで岩田帯の様に重く膨れた腹を下から支えていた。
「慎之介様！」
まるでおセイにより背後から犯されている様な、愛する夫の姿を見て、千鶴が涙を滲ませて大声を上げた。
息を荒げて後ろから襲い来る名状出来ない陶酔の中に身を没していた慎之介ではあったが、千鶴の悲痛な声を耳にして、現実に引き戻され、振返った目に雁字搦めに縛り上げられ、後ろから玄斎に突き立てられる妻の悲惨な姿が映った。
「玄斎様！千鶴は身重で御座います！どうか無体なまねはお許しください！」
愛する若妻の前に惨めな姿を晒す羞恥も忘れ、身重な千鶴の身体を心配した。
「安心せい！これ位腹も大きくなったら安定するモノじゃ！それに儂は前には入れとらん。後ろの穴に入れておるだけじゃ。もっとも前の穴は子袋が下に降りて来ており、入れたくても先っぽしか入らんがの！」
と、身悶える千鶴の肛口を深々と抉りながら笑い上げた。
「恵比寿屋！お主も無体な事をする奴よの・・そんなことをすればお藤の乳房は千切れてしまうのでは無いか？」
と、今や完全に宙に吊り上げられ、足場を求めて脚をバタつかせるお藤の姿を眺めて言った。
「いえいえ、玄斎様。オナゴの身体と云うものは案外丈夫に出来ているもので、オッパイだけで吊るしても保もので御座いますよ。」
と、両の乳房の根元を縛り上げられて吊るされ、その部分に全体重が掛かり藻掻き苦しむお藤の姿を残忍な目で見ながら言った。
「どや、痛いか？こうやって下から持ち上げてやれば少しは下向きの力が減って楽になるでぇ」と、懐から野太い張型を取り出して、宙吊りになって藻掻き苦しむお藤の股間に押し当てた。
そして、それを真下から上に向かってグイッと押し上げた。
挿入された筒具に体重が掛かる痛みに悲鳴が上がった。
「慎之介！それにしてもお主の子は元気が良いのう！こうやって後ろから突き立てていても、出て行けと言わんばかりに子袋の中から儂の珍宝を蹴り上げて来るわ！」
と、千鶴の腸腔内に深々と差し入れ、滑々する腸管の感触を楽しみながら笑った。

「もう直ぐ臨月を迎える頃となり、乳房も以前とは比べ物にならない位大きく膨らんだでは無いか！もう乳も出るのでは無いか？」
慎之介と千鶴の神経を逆なでするように大声で笑い、背後から突き立てながら年齢の割に大きく成長した乳房を鷲掴みにして揉みたて、変色した乳首を扱き立てた。

悪鬼達が思い思いに蹂躙し嗜虐の快感に浸っている時、遅れて篤馬が地獄の蔵の中に入って来た。
おセイに背後から突き立てられ呻吟する慎之介の姿を目にして笑いながら、「盗みに入った女泥棒から犯される美小姓の設定で舞台で演じれば大受けするかも知れぬの！」と、提案した。
「それは良い考えですね！だけどそれだけじゃないんですよ」と、口にすると杉作の名を呼んだ。
杉作が捨太郎を伴って現れた。
全裸の捨太郎の股間のモノは既にカチコチに硬直していた。
杉作は快感に溺れ腰を振り立てるおセイの傍に捨太郎を誘った。
捨太郎の妖しく燃える目は既に激しく振り立てるおセイの肉感的な尻に釘付けとなっていた。
おセイが腰を振る度に双頭の張型を咥え込んだ前の穴と連動してピクピクと双臀の中心の小菊が小さく閉じたり開いたりを繰り返していた。
捨太郎は、いきなり後ろの穴に硬直したモノを押し入れた。
肉欲地獄の妖しげな濃い霧の中に包まれていたおセイであったが、突然肛口を割られて太い男のモノを突き立てられ、激痛に現実に引き戻され悲鳴を上げた。
捨太郎は、そんなおセイの悲鳴も気にせず、後口を抉ったまま激しく腰を使い始めた。
慎之介の隆起したモノを油まみれの掌で揉み上げながら、「男と女と男の三重連結だよ！」と、可笑しそうに大声を上げた。
男の分身をお銀に扱き上げられながら肛口をおセイの張型で抉られ苦悶する慎之介と、前の穴に野太い筒具を収めたまま、後ろの穴を捨太郎の巨大なモノで抉られ悲鳴を上げるおセイの姿を面白そうに眺めた。
「捨太郎もすっかりおセイの後の穴の味を覚えたようだな・・」
と、沸き上がる快感に溺れ、おセイの尻をがっしりと掴んだまま腰を振り立てる捨太郎の姿

を見て笑い声を上げた。

暫く蔵の中の其処彼処で行われている残忍な行為を眺めて楽しんでいた篤馬であったが、大事な事を思い出したように手をポンと叩いて声を発した。
「そうそう、大事な事を伝えるのを忘れておったわ！喜べ！嬉しい知らせが入ったぞ！今し方、清蔵の使いと云う者がやって来てのう、伝言を置いて行ったわ。何でも慈英夢須は当地での商いを終えて昨日出帆したとの事じゃ！その後中国と印度に立ち寄って商いをした後、本国である英吉利（えげれす）に帰るそうじゃ。再び当地に戻るのは早くても一年先になるとの事じゃ。従って志乃殿達もお役御免となりもう直ぐ帰って来るぞ！お前達もさぞ嬉しかろう！」
慎之介や女達は激しく責め立てられて朦朧とする意識の下で、もう直ぐ肉親が帰って来ると言う言葉を確かに聞いた。

蔵の一階の広い板敷きの上に三つの黒塗りの長持ちが置かれていた。
それを取り囲むように玄斎父子、惣右衛門、お銀、杉作達三人の下士など悪人集団が全て集まり、捨太郎が煤けた褌一丁を身に着けただけで、何も分からないのかポカンとした表情で涎を垂らしながら突っ立っていた。
全裸のままの慎之介や千鶴など囚われの女達も集められ、その他、部屋の隅の方には、島から帰ったばかりのお囃子の桃花達も座っていた。
島に渡った時と同じように、志乃達三人は大きな長持ちに入れられて、この肉虐の蔵に戻って来たのだった。
久しぶりに志乃達の肉体を思う存分抱く事が出来ると、待ち焦がれていた篤馬がイソイソと長持ちの蓋を開けて女達を外に担ぎ出した。
女達は出発した時に身に着けていた華麗な着物を纏っていた。
男達は着物姿で立ち尽くす志乃達の姿を眺めて、改めて美しいと思った。
約半年ぶりに見る顔であったが、その間異国人の愛を受けていたためか、女としての円熟度が増し、妖艶で滴るような色香が湧き出している様に感じられた。
ウットリとした目で眺め続ける男達の様子が癇に障ったのか、お銀は、
「いつまでそんな綺麗なおべべを着ているんだよ！お前たちの仕事はもう終わったんだよ！全く厚かましい女達だね！早く元通り素っ裸にならないか！」
と、邪険な声を上げ、手にした竹竿で女達の尻を叩いた。

お銀の厳しい言葉の前に抵抗することは無駄と感じた女達は、瞼を閉じて、着物を留めていた紐や帯を解き始めた。
志乃達と一緒に島から戻って来た桃花、梅花、藤花のお囃子の三人は黙ってその様子を眺めていた。
長い帯が蜷局を巻いて床に落ちた。
そして、それに覆い被さる様に、女達を華麗に装っていた内掛けや中着が柔らかな線を描く女体を静かに滑り落ちていった。
綺麗に着飾っていた女達が、段々と着衣を脱ぎ捨て、女体の持つ艶美な姿を現して行く様子を、男達はネットリとした粘っこい目で眺め続けた。
ただ一人おシズだけがぼんやりと天井を見上げ、呆けた表情を浮かべながら立ち尽くしていた。
その表情や有様から既におシズは正気を失っている事は誰の目にも明らかに映った。
「ほら！脱ぐんだよ！」
おシズの背後に立ったお銀が、乱暴に紐を解いて帯を緩め、剥ぎ取る様におシズの身体から着衣を奪って行った。
志乃とお福は既に肌襦袢を脱ぎ捨て、白い形の良い乳房が露わになっていた。
かつては全裸姿をこの残忍な男達の目に晒すことに慣れていた女達であったが、一時的とはいえ、着衣を許されたことにより人並みの羞恥心が蘇ったのか、赤い腰巻一枚を身に着けただけの身体で、両手を胸の前に合わせ恥ずかし気に身を揉んでいた。
上半身を屈めて両手で必死に乳房を隠す女達の含羞の姿に男達は初々しさを感じて魅せられたように眺め続けていた。
おシズの腰から乱暴に腰巻を剥ぎ取り全裸とさせたお銀は、最後の一枚を残したまま顔を赤く染め立ち尽くす女達を目にして、
「早くそんな物脱いで素っ裸にならないか！」
と、大声を上げて竹竿を振り上げ、羞恥に身を揉む女達を打ち据えた。
お銀の剣幕に恐れをなして、志乃とお福は腰巻を緩めた。
白い滑らかな肌の上を滑る様に赤い布地が落ちて行った。
腰巻が落ちて行く刹那、肉付きの良い白い大腿の合わせ目に男達の目が行った。
慌てて女達は、手で股間の中心部を隠したが、男達の目には黒々とした艶やかな繁茂が生い茂っている事を目に焼き付けた。

「全くお前たちは図々しい女だね！一体誰の許しを得てそんなモノを生やしているんだい？此処に居る時は、何時も剃り上げてビラビラを丸出しにしておくんだよ！」
と、秘部を隠す手を捩じり上げて退かし、恥毛の生え具合を確認して行った。
「全く何様だと思っているんだい？待ってな、今元通り剃り上げてやるからね！」と、杉作達にも手伝わせ、剃毛の準備をしながら言った。
「ほら！手を頭の後で組んで、脚を開くんだよ！」
剃刀を手にお銀が命じた。
「ほら！剃り易いようにもっと腰を前に突き出さないか！」
ジョリジョリと音を立てながら剃刀の刃先が艶やかな繁茂を剥ぎ取って行った。
男達は久しぶりに見た黒々とした密生にも成熟した女の色香が有ると繁々と見ていたが、同時に、剃刀の刃先により白い肌を晒し、女性であることを示す亀裂を暴露して行く様子にウズウズとしたものを感じていた。
お銀の手により剃毛される志乃の隣では、陰部を間近にして興奮に顔を赤く染めた惣右衛門がお福の股間を剃り、杉作達三人が歓声を上げながらおシズの陰毛を奪っていた。

こうして女達は、お銀達の手により久しぶりに持てた女の門を隠す春草を再び奪われ、元通りの剥き身の身体とされてしまった。
お銀達は次の準備のため、床に布団を敷き枕を並べていた。
束の間自由になったお福の身体を母親のお藤が抱き締め、久しぶりの再会に涙を流しながら無事を確かめる様に強く抱き締めていた。
隣では、呆けた表情を浮かべケラケラ笑い声を上げるおシズを姉のおセイが憐憫の表情を浮かべて抱き締めていた。
「申し訳ありませんでした！おセイさん！私が付いていながらおシズさんをこんなにしてしまって！どうか志乃を恨んで下さい！呪って下さい！」
と、床に頭を擦り付けておシズを抱くおセイに向かって土下座をして、泣き叫ぶように詫びた。
正体を失った妹を慈しむ様に優しく背中を撫でるおセイの目から涙が零れ落ちた。
「別に何方(どなた)様にも恨みなど在りません・・妹はこの方が幸せだったんです・・」
と、背中を撫で摩りながら静かに言葉を発した。

「さあ！準備は出来たぞ！」と、玄斎が土下座する志乃の手を掴んで、引っぺがす様に起こすと、床に敷いた布団の方に無理やり運んだ。惣右衛門はお福を、篤馬はおシズをそれぞれ布団の上に押し倒した。
長い間、外人に差し出し、抱きたいと思っても抱けなかった女を再び抱く事が出来る喜びで男達の股間のモノは何時に増して喜びで膨らんでいた。
「毛唐と共に暮らし、毛唐と同じ物を食らっていたのであろう。以前よりも肉付きが良くなったように見えるぞ。そして身体から乳のような匂いが漂って来るわ！」
布団の上に仰向けに横たわる志乃の身体を繁々と眺め渡して声にした。
志乃は両手で顔を覆って啜り泣き、豊かで形良い白い乳房を晒し、脚をしどけなく開いて、お銀から剃毛されたばかりで隠す物の女陰の奥まで玄斎の目に晒していた。
「毛唐に抱かれて、乳房も大きく成ったようでは無いか？」
と、無防備の乳房を握り締め乱暴に扱き上げた。
乱暴に揉みたてられる苦痛に、顔を隠して啜り泣く志乃の口からウッと声が上がった。
「ハハ、以前より柔らかくて、それでいて張りが良く成ったようじゃ・・それでは肝心の姫御前の方はどうかの？」
と、獣欲に狂った玄斎が志乃の上に身体を重ねて来た。
ジェームスの愛の籠った情熱的な愛撫に慣れた志乃の身体は、乱暴に突き立てて来る玄斎に対して嫌悪しか感じていなかった。
玄斎に激しく腰を使われながら、もう少しの辛抱よ！後少しで全ては終わるのだから！と、自分に言い聞かせるのであった。

志乃はジェームスとの最後の日を思い出していた。
これが二人にとって最後の夜だと思うと互いに激しく愛し合った。
二人は、愛し合い、求め合い、狂おしいほどの愛欲に浸り、疲れ切ってそのまま眠りについた。
窓から差し込む優しい朝の光に包まれ志乃が微睡から醒めた時、ベッドの隣で仰臥するジェームスが慈愛に満ちた目で眠っていた志乃の事を見詰めていたことに気づいた。
瞳を開けた志乃の視線とジェームスの視線がかち合い、
「グッドモーニング、シノサン・・」
と、はにかんだ様に言葉を掛けて来た。

そして、一転して思い悩んだ様な真剣な表情を浮かべると、
「ワタシ・・ズット・・シノサンノ・・リヴェンジノコトカンガエテマシタ・・ソシテコレシカナイトオモイマシタ・・ソレデ・・ブカヲ、ホンコンニツカイサセ・・コレヲテニイレマシタ。」
と、突然喋り出し、志乃の目の前に茶色のガラスの小瓶を差し出した。
ジェームスの手にするガラス瓶の中には何やら透明でドロッとした液体が入っていた。

今や玄斎は激しい勢いで志乃の女を突き続けていた。
その激烈な腰の動きに志乃の女の本性が呼び覚まされて行くのが感じられた。
ああ・・肉欲だけの快感！・・愛の無い・・相手を労わる気持ちの無い一方的な暴力によってもたらされる責め苦にも似た絶頂感！・・
お銀達から長いあいだ調教され続け肉体改造された己の身体は、例え暴力であってもそれを女体の喜びとして受け入れ、甘美な恍惚の世界に身も心も誘(いざな)う様に躾けられて来た。
自分は玄斎によって、もう直ぐイカされるであろうと感じていた。
しかし、ジェームスとの愛ある交接を女の心が覚えた今、それは水も無い涸れ果てた砂漠を無理やり引きずり回され、苦痛の末に死を迎える時の恍惚感に過ぎなかったと感じていた。
心は温かい愛を求めていた。しかし、心を裏切った淫乱な女体は玄斎に突き立てられ絶頂へ向けての石段を一歩ずつ登り始めていた。
急に目の前が真っ白になった。
何の音も無い静寂で何も無い真っ白な空間の中で、どこかで女が激しく声を上げるのが聞こえて来た。
「あれは、私の声？」
その大きな女の浅ましい声に、何もない世界に彷徨う意識だけの存在となった志乃が、不思議な声を聞いたと言う様に問い掛けた。
まるで天上から見下ろすように若い女が布団の上に横たわり、それに大男が身体を重ねているのが見えた。
女の両脚は男の腰を挟み込み、自ら淫らに腰を蠢かせていた。
肉体と完全に分離していた志乃の意識が、やがて肉体との合体を始めた。
白々と戻り始めた意識の中で、志乃の肉体内に埋め込まれた熱いモノが痙攣しているのが感じられた。

その魔物じみたモノからドクドクと毒液が胎内に注ぎ込まれている。
幾度もジェームスと愛の喜びを味わい、分かち合った自分の聖なる泉がどす黒い濁液により穢されて行くのが分かった。

久しぶりに志乃の女体を堪能した玄斎は、次にお福の上に身体を重ねて行った。
三人の悪鬼達はそれぞれ相手の女を代え、女肉を貪り続けた。
苦痛に涙する女達を励ますように、何時の間にか桃花が朗々と端唄を歌い出し、お囃子が始まっていた。

女達を再び征服した三人の男達は、激しく腰を使った疲れを癒すように酒を酌み交わしながら、大声で笑い合っていた。
「さて、身体も休まった事だし、もう一勝負するとしようか・・」
と、玄斎が腰を上げた。
その時、「ちょっと待って下さいな・・」と、桃花が声を発し、色っぽい目で玄斎の方を見詰めた。
「私たちは何時も遠目で旦那方の豪刀を眺めるだけ・・今まで抱かれた事がありませんわ。一度は、その逞しいモノを食べさせて下さいな・・」と、口の端に滴り落ちるような艶然とした笑みを浮かべ鼻に掛かる様な甘えた声を出した。
その桃花の全身から立ち上るような色香にブルッと震えた。
これまでお銀から桃花達のソコの具合の良さは聞かされ興味を持っていたが、桃花が口にするように、確かにこれまで桃花達の身体を抱いたことは無かった。
男達の心は急速に、この三人のお囃子の女達への肉欲が高まって行った。
逸った男の手が着物を掴むのを、
「そんなにガッツクもんじゃありませんよ・・」
と、艶っぽい声を出して、優しく指を解きほぐした。
男達の目の前でお囃子の女達は、妖しく身体をくねらせ甘い息を吐きながらそろりそろりと着物を脱いでいった。
その男心を擦(くすぐ)る術は、まだ志乃達が身に着けてない技術だと、生唾を飲み込みながら見惚れていた。
「さあ・・準備は出来ましたよ・・」

と、全裸になった女達は目の前にへたり込む男達の頭を掴んで、顔面に自分の股間を押し付けた。
濃厚な陰部の匂いが鼻腔を突き、頭に血が上った男達は狂ったように舌を伸ばして相手の秘奥を舐った。

「ああー良い！ああー良い！」
玄斎の上に馬乗りになった桃花が股間から込み上げる快感に、もどかし気に腰を振りながら感に堪えないような声を上げていた。
その桃花の極上の内部に感激した玄斎も「良いぞ！良いぞ！」と歓喜の声を上げていた。
二人は幾度も体位を変えながら、汗みどろになって愛欲の世界に没頭していた。
隣では篤馬と惣右衛門も興奮に汗を浮かべて男と女の肉弾戦を戦っていた。

幾度も頂上を極め、互いに満足した男女が布団の上に伏していた。
「旦那、どうでした？お気に召しましたか？」
桃花が玄斎の厚い胸に頬擦りしながら甘い声音で尋ねた。
「ああ・・良かったぞ！ただの三味線引きにしておくのは惜しい様な身体じゃ！処で儂の自慢の名刀はどうであった？」
「ええ、とても美味しくって、何度も極楽を見せてもらいましたわ・・」
と、潤んだ瞳で色っぽく玄斎を見詰め、唇を求めながら囁くように言った。
「処で旦那、もっと良い気持になりたいと思いませんこと？」
「何？もっと良い気持に？」
と、桃花の目を見詰めながら訊いた。
「ええ・・実は慈英夢須様から頂いた南蛮渡りの媚薬が有るんですよ・・」
艶然と笑みを浮かべると、自分の脱ぎ捨てた着物の袖を探って茶色の小瓶を取り出して玄斎の目の前に示した。
「これを飲んでやると、女はとても感じ易くなってアソコの締りも良くなり、お汁も一杯湧き出すんですよ。男はアレが一層硬く大きくなり、何時間やっても疲れる事無く出来るんですわ・・私も向こうにいる間に何度も使われましたが、それはそれは天にも昇るような気持ちでしたよ・・」
と、小瓶を見せつけながら頬に笑窪を作って婀娜っぽく微笑んで見せた。

瓶の中には透明な粘稠の液体が入っていた。

「コレ、パラライザネ」
志乃は最後の日にジェームスが茶色の小瓶を志乃の手に握り締めさせながら言った言葉を思い出していた。
「ドクデワナイカラ、コロスコトワデキナイ。バット、コレヲウスメテノマセレバ・・アイテワカラダガシビレテ、ミウゴキデキナクナル・・トクニ、アルコール・・オサケニイレテノマセレバ、ハヤクツヨクキク。アイテガミウゴキデキナイアイダニ・・コロセバイイ。モンダイワ、ドウヤッテノマセルカダガ？」
志乃は桃花に相談した。
この頃二人は強い信頼関係で結ばれていた。
「アンタがそれを持って帰っても、また素っ裸に剥かれて、彼奴等に見つかってしまうよ！良いよ！アタイが持ってってあげるよ。そして隙を見て玄斎達に飲ましてやるよ！」
と、胸を叩いた。

「確か、西洋にそのような媚薬が在ると話に聞いたことがある・・」
桃花の女は感じ易くなり、男は何時までも保つと云う話を聞いて、知ったかぶりの知識を披露した。
玄斎の言葉に篤馬も惣右衛門もその気になって来た。

向き合って座る男女の間に六個の湯飲みが用意された。
その中に瓶の中の液体が取り分けられた。
「先ず、お前が飲んでみろ。」
疑り深い玄斎が先に桃花達に呑む様に命じた。
「ええ、よござんすよ・・」
と、何食わぬ顔で自分達の湯飲みにお湯を入れて溶かした。
桃花は湯飲みを手に取ると、一息で飲み干した。
桃花の目配せを受けた藤花と梅花も遅れず、グイッと飲み干した。
湯飲みの中の物を飲み下して、ハーッと息を吐くと、「さあ、旦那たちも飲んで下さいな。これは、酒で薄めて飲むと早く強く効くんですよ！」

と、玄斎達が酒盛りしていた徳利を手に取り、湯飲みに注いだ。
「うむ・・何か変な味じゃな・・」
玄斎が湯飲みの中の薬を味わいながら口にした。
「良薬は口に苦し―と云う言葉も有りますし・・」
篤馬は気にする様子も無くグイグイと飲み干した。
男達が飲み干したのを見て桃花は心の中でニィと笑った。

「それでは、早速始めるとするか・・」
玄斎が床から腰を上げようとした。
その時、まるで腰が抜ける様に尻から倒れ込んでしまった。
そして、指先も痺れるような感覚を覚えた。
「おのれ！何を・・飲ませた・・」
呻くように声を発した。
「馬鹿だね・・あんた達が飲んだのは・・び、媚薬じゃなくて・・し、痺れ薬さ・・」
桃花も薬が回り始めて、呂律の回らない口で嘲笑う様に応えた。
「おのれ！・・手計（たばかり）・・おったな・・」
女達の罠に嵌められたのを知った時には、既に身体の自由を奪われていた。

おセイが機敏に動いた。
玄斎達は武士であるから外出する時は必ず大小の刀を差して出かける。
しかし、この蔵の中では腰に刀が有ると不自由であり、万一女達に奪われたら面倒な事になるので、隠し棚に仕舞っておくのだった。
巧妙に隠したつもりであったが、長年の間に女達はその隠し棚の在処（ありか）を知っていた。
おセイは隠し棚を開いて中に置かれて大刀を手にした。
突然の事態に真っ青となった杉作達三人の下士が捨太郎を置いて悲鳴を上げて逃げ出そうとした。
「おのれ！妹の恨み！」
と、刀を手にしたおセイがメクラめっぽう振り回して、杉作達を切り回した。
手傷を負い、おセイの怒りに恐れをなした不良下士達は床の上にへたり込んでしまった。
そんな抵抗の気力も亡くし、しゃがみ込む男達に嵐の様に刃を振るい続けた。

玄斎と篤馬と惣右衛門の三人はすっかり痺れ薬が回って、桃花達三人と互いに脚を向け合う様に床の上に仰向けに横たわっていた。
玄斎と篤馬の父子は痺れて身体の自由を封じられ、呂律の回らない口で何やら呻き声を上げていた。
悪人共と同じように全裸のまま仰向けに横たわる桃花が、言葉にならない呻き声を上げ、励ますように志乃に視線を送った。
慎之介が大刀を携え、志乃が小刀を握り締め傍に寄った時、普段傲岸不遜に構えていた玄斎の顔から血の気が失せ、目には恐怖の色が浮かんでいた。
必死に手足を動かそうと藻掻いたが、僅かにピクピクと動くだけであった。
「おのれ！父の仇！」
「母の恨み！」
刀を手にした慎之介と志乃が真上から身動きの出来ない玄斎に突き立てた。
赤い血が噴水の様に吹き上がった。
最後の力を振り絞って慎之介の足首を掴んだが、振り下ろした刀により両断されてしまった。
切り口からドクドクと血が流れ出た。
「夫の仇！息子の仇！」
「父の恨み！兄の恨み！」
小刀を握り締めたお藤とお福が、惣右衛門の傍らに片膝ついて、肥満した身体をブスブスと何度も突き立てた。
その度に惣右衛門の身体は痙攣してビクビクと蠢き、赤い血飛沫が吹き上がった。
床に仰向けになったまま痺れ薬の効果に逆らって何とか身体を動かそうと藻掻く篤馬の上体を跨ぐように志乃が仁王立ちになった。
そして手にした小刀を逆手に持ち変えると思い切り高く持ち上げた。
己の運命を悟ったのか、篤馬の目には恐怖は無く、大股で跨ぐ志乃の剃毛されたばかりの柔らかな肉の亀裂の間に秘められた部分に視線が泳いでいた。
己の分身を幾度と無く突き立て、淫具により数限りなく蹂躙した無毛の股間がパックリと割れ、あからさまに女の構造を示す雌芯をじっと見つめ続けていた。
志乃は涙を流しながら、憎い篤馬の身体に刃を突き立てた。
志乃を奸計に嵌め地獄に突き落とした男は、大胆に脚を開いて自分を跨ぎ、刀を突き立てる志乃の姿を真下から見上げながら、突き刺される寸前ニヤッと笑ったように見えた。

全裸の女達の白い身体が、返り血で真っ赤に染まっていた。

血の海の中に横たわる三人の悪党たちは完全に命を失っていた。
阿修羅のように暴れ回るおセイの刃に切り刻まれた杉作達は、床にへたり込み壁に背を預けたまま全身から血を流し呻き声を上げていた。
捨太郎は一体何が起こっているのかも理解できないようにボーッと立っていた。
慎之介が背後から巨体を袈裟懸けに切りつけた。
流石に激痛に、こちらを向いた捨太郎に刀を横に払い腹を切り裂いた。
切り裂かれた腹から腸が飛び出し、そのまま床に崩れ落ちた。
女達はそれぞれ刀を手に、蟻が象に群がる様に群がると、四方からブスブスと突き立てた。
蔵の中の男達を全て打倒した女達ではあったが、まだ恨みを完全に果たすまでに至らなかった。
憤怒に燃える女達の視線は最後の生贄に集中していた。
お銀は復讐心に燃えた女達の殺戮の光景を目の当たりにして恐怖で床の上にへたり込んでいた。
お銀の尻の周りは、お銀の垂れ流したものでグッショリと濡れていた。
全ての倒すべき敵を倒した後、慎之介は腰を抜かしてへたり込むお銀の前に立った。
女達の怨嗟の視線に取り囲まれるお銀の目には慎之介の姿が憤怒に目を光らせ刀を手にする不動明王のように映った。
慎之介は見せつける様にお銀の鼻先に血に塗れた刀身を突き付けた。
お銀の目は裏返り、声にならない悲鳴を上げて恐怖に身体を悶えさせた。
お銀の着物の下で再びジョワーという音が上がり、見る見る着物や床を濡らして行った。
そして、それに次いで何やら尻の下からブリブリという音が聞こえ、お銀の周りで黄色く溜まっていた池が茶色い色に染まり出し、悪臭も漂い始めた。
「お、お願いです・・そ、そんな・・性悪女でも・・わ、私達の仲間です・・命だけはお助け下さい・・」
桃花は、痺れる身体で、口も回らない中、必死に慎之介の方に手を伸ばして、お銀の命乞いをした。
「こんな糞塗れの女を切ったとて、刀の穢れになるだけじゃ・・目障りだ！何処へでもとっとと去れ！」

と、キッと硬く瞼を閉じ、叫ぶように言った。
桃花の必死の哀願により命を助けられたお銀は、腰が抜けてまともに立って歩くことも出来ず、腰をカクカクさせながら両手をついて犬の様に這って蔵から出て行った。

女達に地獄の辛酸を嘗めさせてきた蔵の床には、無数の蝋燭が何重にも輪のように並べられ室内を明るく照らしていた。
そして蝋燭の作る環の中には、まるで祭壇の様な台が置かれ、切り落とされた玄斎、篤馬、惣右衛門の生首が並べられていた。
「ああ・・姉上！」
「ああ・・慎之介！」
恨めし気な表情を浮かべる生首が置かれた台のすぐ下で、志乃と慎之介の姉弟が激しく求め合っていた。
蝋燭の作る環の中心で、蝋燭の赤い光に染め上げられながら、狂ったように口を吸い合い、腰を打ち付け合って抱き合う姉弟の姿を、取り囲む女達はまるで神前で奉納される舞を見るような神々しい目つきで眺め続けていた。
ようやく悪人共による軛（くびき）から逃れ自由を取り戻したという喜びと、若い男女の目眩く性の喜びが、肉体の心底に秘められた生命の歓喜を呼び覚まし、本能に赴くままに抱き合った。
舞台での艶技でも見せたことの無い様な、喜悦の叫び声が上がり、股間からは豊富な愛液がドクドクと流れ出て、濃厚な樹液に満たされた蜜壷で慎之介のモノを締め付けた。
慎之介も汲めども尽きぬ姉の秘園に魅せられ、姉上！姉上！と鼻を鳴らして呻くように声を上げ、幾度果てても再びその快楽の根源を貪るのであった。
全裸で抱き合う二人の生命（いのち）の舞は何時果てるとも知れなかった。

床一面に敷き詰められていた蝋燭に薪がくべられ、忌まわしい記憶しかない蔵から火の手が上がった。
見事仇討ちを果たし、女達がこの地獄の屋敷から脱走した時には、既に時代は‘天保’から‘弘化’へと改まっていた。
ペリーが黒船を率いて来航するのは、弘化の次の嘉永６年であるから、激動の江戸時代末期を迎えるまで後８年を切っていた。

仇討ちの果て

仇討ちを果たし、玄斎父子の生首を入れた首桶を持って川田に帰郷する志乃と慎之介と千鶴の三人であった。
臨月を間近に控えた千鶴が苦しそうに歩みを進めていた。
慎之介が千鶴の背を摩り労わりながら宿から宿への旅を続けて来たのだった。
ふと志乃がそっと下腹を摩っているのが千鶴の目に入った。
昨日宿で一緒に湯を使った時、志乃の白い腹が少し膨らんでいる様に感じていたのだった。
「志乃様、もしや？」
千鶴が志乃の顔を見詰めながら恐る恐る尋ねた。
「ええ・・そうですよ、これは慈英夢須様の御子・・」
千鶴の問いに艶然とした笑みを浮かべて、驚愕に瞳を開く千鶴の目を優しく見詰めながら答えた。
「姉上！」
慎之介が顔色を変えて悲痛な叫び声を上げた。
戒律の厳しい武士の世界では不義密通は御法度（ごはっと）。ましてや異人の子を孕んだとあっては、本人は死罪の上、お家取り潰しは免れないだろうと思った。
「ですから、私は笹川の家には戻りません。二人が川田の地に足を踏み入れたのを見届けたら、私は一人旅に出て、この子を産んで育てます。」
と、何事も無かったように微笑みを浮かべて語りかけた。
この優しくも強い心を持った姉は、決して信念を曲げることが無いことを知っている慎之介は返す言葉も見つからず、幸せそうな笑みを浮かべ下腹を撫でる志乃の顔を見続けた。

国境の関所は目前に控えていた。
この関所を越えれば、男の急ぎ旅なら一昼夜、千鶴の胎の具合を見ながらでも三日も在れば懐かしい笹川の家に帰れる筈であった。
それは、この姉との別れが目前に迫っている事を意味した。
「千鶴や、元気なやや子を産むんですよ。そして、二人で立派な世継ぎを育てて笹川の家を守っていくんですよ・・」

「姉上！」
「志乃様！」
苦労を共にして来た志乃との別れが目前に迫っている事を突然意識させられ、二人は涙を浮かべて悲痛な声を上げた。
「それより慎之介・・姉はもう苦しくてなりませぬ・・」
志乃の額には脂汗がびっしょりと浮かび、苦しそうに眉根を寄せて、早い呼吸を繰り返している事が判った。
二人にはまたあの発作が起こり始めたことを理解した。
供に天を頂かざる憎い仇の奸計に嵌められ、それ以来昼夜を分かたず淫惨な責めを受け続け、常に女陰や肛口や口内に男のモノを突き立てられ、脳内は淫蕩な雲に覆われ続ける状態に肉体が順応してしまい、男と交わっていないと禁断症状を発し、自制も効かず狂ったように男を求め発作を起こすのであった。
恵比寿屋の地獄の蔵を抜け出してから、もう何日も男と交わることなく過ごして来た。
その間何度も突発的に発作を繰り返し、二人で狂ったように暴れる志乃の身体を押さえ付けるのであった。
「慎之介・・お願い・・最後にもう一度だけ、お前の身体を抱かせておくれ・・」
日頃の志乃とも思われない淫欲に籠った眼で慎之介を見詰め、弟の身体を求める様に両手を広げた。
「いけません！志乃様！一緒に川田の屋敷に戻りましょう！」
千鶴が必死の声を上げて諫めた。
慎之介にしても玄斎達の奸計に堕ちて二年近く、常時女達の口や陰唇や肛口に我が分身を突き立て、時には憎い仇から自分の後を犯される日々が続き、いつの間にか汚辱と苦痛の果てに、怪しげな快美感を脳髄に刷り込まれてしまっていた。
起きている時も寝ている時も抗し切れない様な激烈な淫魔に襲われ続けていたのであった。
こうして旅を続けていても、目の前の長閑（のどか）な田園風景に重なって、禍々しく巨大な唇の悪魔が現われて彼を貪り食おうとする幻が見られたり、毒々しい女の淫裂の姿や双臀の間に咲く毒花の姿が幻影となって現れ、彼を苦しめるのであった。
彼の脳内では、淫魔が甘美な言葉を囁きかけて誘惑し、涎を垂らしながら慎之介の生肉を求めて襲い来る、それらの魔物の幻聴や幻影が彼を苦しめ続けていた。
彼の若い身体はその毒々しくも魅惑的な誘惑と同化してしまいたいと願い、一方では気力を

振り絞ってその誘惑を排除しようと気力を振り絞るのであった。
旅の歩を進める間に、薄い褌を通して袴と擦れる刺激で股間の肉塊が熱を発するのも一日に一度や二度では無かった。
そんな苦し気な夫の表情に気付いた時、千鶴は慎之介を街道から外れた林や物陰に誘い込み口で処理をしてやるのだった。
口の中に広がる慎之介の香りと、ほのかに甘みを含む樹液を飲み下す時、千鶴も至福の喜びを感じるのであった。
慎之介の目にも、現在、志乃が苦しい性の渇望感に苛まれている事が判った。
そして、幾度も自分に喜悦の喜びを与えた姉の女体の甘美な感触が蘇り、もう二度とこの姉と身体を接することが出来ないのかと頭を過ぎった。
志乃の濡れた瞳で見詰められ慎之介の咽がゴクリとなった。

街道沿いに今にも壊れそうな茅葺小屋が在った。
恐らく農作業の道具を入れておいた所か、其処には人は住んでいないようであった。
内部には、ほんの四畳ほどの土間があるだけの小さな小屋であり、土間の上には腐りかけた筵(むしろ)がいくつか敷いてあり、今は使われていないような朽ち果てた道具類が埃をかぶって散在していた。
千鶴が止めるのも聞かず、二人は手を取り合ってその中に入り込んだ。
千鶴はオロオロと慌てて、廃屋の外に周囲を見張る様に立った。
志乃は紐を解くのももどかしそうに慎之介の袴の紐を緩めて袴をズリ下げた。
袴の下には既に褌を突き破ろうとするかの様に巨大な肉柱がそそり立っていた。
慎之介の肉塊から滲み出た分泌液で既にその薄い布地は濡れていた。
志乃はそっと慎之介の褌を脱がした。
其処には猛々しく怒る慎之介の男のモノが天を突くように聳え立っていた。
「ああ・・慎之介のモノ・・私に幾度も汚辱と苦痛を与えたモノ・・そして、私に幾度も女の喜びを与えたモノ・・」
優しい顔立ちと、男にしては華奢な白い身体つきとは似合わず黒々と雄渾に聳え立つ慎之介のモノをじっと見つめながら呟いた。
「ああ・・可哀そうに、私の愚かさゆえに玄斎達の奸計に堕ちなければ、こんな醜く肥大し・・そして、女に随喜の涙を零れさせる・・モノにはならなかったろうに・・」

直立する慎之介の前に跪(ひざまず)いた志乃は両手でそれを捧げ持ち、唇を押し当てた。
「ああ・・姉上・・」
志乃の唇が張り詰めた慎之介の粘膜を撫でた。熱い息がそれに吹きかかった時、慎之介の脳髄をゾクゾクっとする刺激が駆け抜けた。

慎之介の性感を煽り立てる様に、丹念に唇と舌を使って、熱く熱を帯びた肉塊の周囲を嘗め回した。
姉の柔らかな唇と舌による甘美な刺激に何時しか慎之介は喘ぐような声を発していた。
あーっ姉上！アーッ姉上！慎み深い武家の女なら絶対に持ちえない娼婦のような毒々しい技を使い、まるで女郎蜘蛛が獲物を粘っこい糸に絡め取るように、次々と自分の分身を絡め取って行く我が姉！憎い仇の目の前や舞台の上で野卑な観客の見詰める前で何度恥辱の涙を流し、同時に目眩く快美感に浸り恥辱の姿を晒した事だろう―と、地獄の様な日々が目の前に回想された。しかし、お銀から教え込まれた志乃の卓越した技量は忽ちそんな苦しい記憶も流し去り、淫奔で激烈な快美感が心を支配してしまった。
志乃も口唇で慎之介のモノを愛撫しながら、益々熱く硬度を増して行くピクピクと蠢くモノに煽り立てられ、甘い鼻音を鳴らしていた。
「アアーッ！姉上！」
突然志乃の口が大きく開いて慎之介のモノを深く咥え込んだ。
温かい唾液に満ちたその部分は、お銀によって鍛えられた第二の性器そのものであった。
温かい海の中の藻の様に舌が蠢き慎之介のモノを撫でた。
アア・・慎之介の味、臭い・・弟の男性器を口の中に含みその感触が口内一杯に広がると激しい官能の渦がサーッと駆け上がり脳髄を直撃した。
慎之介も凶暴な発作に襲われた様に、突然志乃の頭を両手で挟むと、激情に駆られるままに姉の口内に熱く熱したモノを手荒く抜き差しした。
薄っすらと焦点の無い目を開いたまま、不可思議な桃源境の中を彷徨う慎之介は、分身を姉の口内に突き入れたまま腰をブルブルと震わせ恍惚の表情を浮かべていた。
ピクピクと快感に痙攣する弟の肉塊を愛しながら、心の中で、「来て！・・慎之介・・姉の口の中に、貴方の熱いモノを注いで！」と、叫んだ。
志乃の心の叫びが通じたのか、突然口内を激しい放射が襲った。
荒々しい男の臭いを放散させる熱い樹液が、びゅっびゅっと何度も注ぎ込まれた。

小屋の粗末な窓格子を握り締めたまま、千鶴はオロオロと中の様子を覗き込み続けていた。
半ば腐りかけていた土間に敷かれた筵の上に、脱いだ着物を敷いて全裸となった志乃が横たわった。
「来て！慎之介！」
志乃が潤んだ瞳で、既に全裸となっていた慎之介の名を呼んだ。
横たわる志乃の足元に立つ慎之介の股間のモノは隆々と天を向いていた。
志乃は熱っぽい目で弟の黒々とした何人もの女の随喜の涙を流させた雄渾なモノを見詰めていた。
慎之介がゆっくりと姉の裸身の上に身体を重ねて行った。
「アアーッ！慎之介！」
弟の肥大したものが自分の股間の門を押し開いて侵入して来るのを感じ、これであの苦しみから解放される―と、喜悦の声を発した。
自分の最も大切な個所の柔肉を押し開いてジワジワと侵入して来る熱鉄を華洞の襞一つ一つに感じながら、これまで幾度歓喜と汚辱の渦に引き込まれた事だろう―と、ふと峻烈な記憶が蘇ったが、神と遭遇した時の様な畏れと恍惚感が拡がり忽ち苦い記憶を消し去っり、恍惚感が心の中に拡がって行った。

オロオロしながら中を覗き込む千鶴の様子に好奇心を感じたのか、一人の村人が興味深そうに小屋の中を覗き込もうとした。
「アアーッ！いけません！中を見てはいけません！」
慌てて千鶴は村人を押しのけようとした。
少女の必死の抵抗を無視して、そして、千鶴の行為に益々関心を掻き立てたのか窓から中を覗き込んでしまった。
小屋の中を覗き込むと、思わず目を丸くして思わず声を上げてしまった。
そこには武家風の若い男女が全裸で激しく行為の最中であった。
全身汗まみれになり、身体を打ち震わせ歓喜の声を漏らし、淫靡な営みに没頭する二人に窓格子を握り締めたまま、血走った目で睨むように見つめ続けた。
瞬きも忘れて一心不乱に覗き込む男の咽が何回も鳴った。
暫しの間小屋内部を覗き込んでいた男であったが、ふと何かを思い出したように足早に立ち

去った。
男が去ってホッとした千鶴であったが、間もなく大勢の男の声がこちらに向かって来るのに気付いた。
先程の村人が大勢の村の男達を引き連れてやって来たのだった。
大勢の男達が小屋に取り付くのを阻止しようと千鶴は両手を広げて頑張ったが、男達は無理やり千鶴を押し退け、窓や壁板の隙間から中を覗き込んだ。
「アアー！志乃様！慎之介様！お止め下さい！人が見ております！」
必死の思いで小屋の中の二人に向かって叫んだ。
「ああー、見られている・・」甘美な性行為に没頭する志乃の心の中に見世物小屋の舞台の上で淫欲に燃える男達の見守る前で演じさせられた羞恥の艶技の記憶が蘇った。
立錐の余地も無い客席を占める野卑な男達の視線を浴びながら、卑猥な言葉を投げ掛けられながら、実の弟と浅ましい行為を演じている・・今、志乃の頭の中には華やかで淫靡なお囃子の音(ね)が鳴り響いていた。
「見て・・見て・・志乃の恥ずかしい姿を良く見て！」
「志乃の淫らな姿を見て珍宝をおっ立てて・・」
惑乱する志乃の頭の中では、客席から手を伸ばせば届きそうな狭い舞台の上で弟と白黒の艶技を演じている様な幻想に落ちていた。
淫情に燃える男達の好奇な視線に晒されながら姉弟で恥掻き芸を演じさせられる事は、最初は、残忍な男達から強制されてやった事ではあったが、何時しかその悲惨な現実に呑み込まれる様に人としての心を無くして獣の様な淫欲の坩堝に自らを投げ込むことにより今日まで命永らえて来たのであったが、今再び村人たちの淫靡な視線を浴びせられ、卑猥なヤジを投げ掛けられる事により蘇って来ていた。
「アアーッ・・慎之介・・後ろにも、後ろにもお願い・・」
慎之介の熱い情熱を何度も受け止めた志乃は、四つん這いの姿勢を取り、白い尻を向けながら、強請(ねだ)る様に腰を振った。
男達のギラギラする視線と熱っぽい声に、油に火を注がれた志乃は最早止めようもなく激しく燃え上がっていた。
男肉を求める志乃のその部分は、まるで餌を捕食する海底の軟体動物の口腔のようにピクピクと蠢いていた。
疲れを知らぬ慎之介の怒張がせわしなく収縮を繰り返す菊花の中心にピタリと押し当てら

れた。
「ああー・・入って来る・・慎之介の硬いモノが入って来る・・」
狭い肉洞を切り裂いて熱いモノが侵入して来る感触に背中を仰け反らして喘ぎ声を上げた。
「オオーッ！今度は尻の穴で繋がったぞ！」
村人達の口から初めて見る男女の肛門性交の図に驚きの声が上がった。
小屋を取り囲む野次馬たちの数はどんどん増え続け、村人だけでは無く街道を行き交う旅人達も加わっていった。
こうして広くも無い街道を塞ぐように無数の人々の群れとなって膨れ上がった。
街道を閉塞する人々の大騒ぎは、ほど近い関所役人の感知するところとなった。
余りにも多くの野次馬達になす術も無く、オロオロとしながら成り行きを見守っていた千鶴は、何人もの関所番人がこちらに駆け寄って来るのに気付いた。
「志乃様！慎之介様！お止め下さい！役人が来ます！」
千鶴が小屋の中に必死の声を投げ掛けたが、肛門性交の法悦境に浸る二人の耳には最早届かなかった。
駆け付けた役人達は突棒や刺股を振るって小屋に張り付いた男達を強制的に排除し始めた。
野次馬達に替わって小屋の窓を覗き込んだ取り方たちはギョッとして動きを止めた。
そして、遠巻きに小屋を取り囲む人々の目も忘れて、血走った目で小屋の中を覗き込んだ。
そして、そのあまりに刺激的な光景に目を奪われ釘付けとなった。
中では若い男女が歓喜の声を上げながら尻で繋がっていた。
役人達はすぐ傍で人が見ているのも忘れて憑かれた様に小屋の中を覗き続けた。
二人の扇情的な姿に没頭して思わず股間を押える男達が何人も居た。
姉との今生の別れ、もう二度と姉の柔肌と接する事は無いという思いが心を突き上げ激しく求め続けていた。
全身に汗を浮かべ息を荒げながら激しく腰を打ち付け続けた。
突然絶息するような声を上げて志乃の身体が仰け反った。
志乃の絶頂に合わせて慎之介も呻き声を発して、堪えに堪えた緊張を解きドッと熱い奔流を腸内奥深くに流し込んだ。
二人は一つに繋がったままドッと崩れ落ちた。
激越な絶頂の姿に息を呑んで呆然としていた関所役人であったが、ふっと我に返ると手下達に二人を捕縛するように命じた。

取り方達の手が掛かり、我に返った慎之介は拙い事になったと思い、外の千鶴に声を発した。
「千鶴！先に笹川の家に行くのじゃ！吾らは後から行く！」
慎之介の必死の叫び声に千鶴は取り囲む人々の群れからそっと離れた。

志乃と慎之介は素っ裸のまま縄掛けされ、引き立てられた。
役人達に取り囲まれながら関所迄連行されて行った。
人々が道の両側に列に並んで姉弟の裸身を見詰めた。
歩くたびに憎むべき男達に揉み上げられ発育した乳房がフルフルと揺れ、むっちりと肉付きの良い志乃の白い身体を指さして粘っこい視線を送りながら、お銀から剃毛されて日が経たず、まだ伸び切らぬ股間の茂みに気付いて淫猥な笑いを上げた。
志乃の短い痴毛はくっきりと切れ上がった秘裂を隠す役割をまるで果たしておらず、人々の野卑な視線を避けて股を窄めて歩きつつも隠し処がチラチラと覗いた。
そして歩行を進める間に、前後の秘孔からは慎之介が注ぎ込んだ精液が滴り落ち見守る男達の淫靡な笑いを誘った。
噂を聞いてかけ付けた村の女達も、優しい貌をした色白の美青年の慎之介の顔をウットリと見詰め、次に股間から垂れ下がった、華奢な体つきとは不似合いな程大きな黒々とした雄渾なモノを目にして顔を赤らめた。

関所奉行の屋敷の前の地面に敷いた粗莚の上に志乃と慎之介が座らせられていた。
二人は素肌の上に粗末な囚衣をきせられただけで、囚衣の上から厳しく縄掛けされていた。
江戸時代では武士、僧侶、雑人など身分により縄の掛け方が違っており、縄掛けを間違わないよう厳重に管理されていた。
志乃に掛けられた縄は乳掛縄という女性一般に掛ける縄であったが、慎之介に掛けられている縄は十文字縄という武士に掛ける縄では無く雑人に掛ける縄であった。
奉行屋敷の開け広げられた障子の奥で床几に押し掛けた関所奉行が鼻白んだ表情で二人を見ていた。
階(きざはし)の下で同心が取り調べた結果を奉行に報告した。
「この両名、川田藩の藩士笹川慎之介とその姉志乃と申しております。二つの首桶を持っており、その中の生首は、この者らの父親を殺した仇で秋芳藩剣術指南役を務めておりました赤坂玄斎、並びにその子柏木篤馬とのことで御座います。但し正当な仇討ちを証明する書状

は持っておりませんでした・・」
志乃は、大切な仇討ち免状が篤馬により切り刻まれ、自分の尻の穴に詰め込まれ水便と共に排出させられた記憶が蘇り、悔し気に下を向いて顔を赤らめた。
「ふーん、藩の剣術指南役となれば相当の手練れであろう・・このような青白い若造と小娘に仇が打てるとは思えぬがのぅ・・」
と、縄掛けされた二人を見下ろして疑わしそうな声を上げた。
姉弟は、「本当で御座います！」と、必死に声を発した。
「念の為に秋芳藩に問い合わせてみますか？」
「無駄な事よ！もしこの者らの申すことが本当であったとしても、仮にも藩主に剣術を指導する指南役が仇持ちで、仇討ちにあって首を撥ねられた等(など)とは、藩の名誉に関わる事ゆえ本当の事は言わぬわ！」
「川田藩ならこの近く故、早馬を立てれば本日中には、この者らが藩士で仇討ちの旅に出たか否か調べることは可能と思いますが・・」
二人に同情する同心が奉行に詰め寄ったが、
「もう良い！昼日中から大衆の目も顧みず、実の姉弟でケツメドで繋がるなど犬畜生にも劣る所業じゃ！武士というのも片腹痛いわ！非人元締めに連絡してこの者らを穢多の部落に下げ渡せ！」
同心としては、関所奉行の命令に逆らいようも無く、「はは―！」と頭を下げた。
奉行の非情な決定に青くなった志乃達は、「何かの間違いで御座います！川田まで使者を送ってお調べください！」と、必死に哀願したが、床几から立ち上がった奉行は二人に背を向け、障子をぴしりと閉じてしまった。

程なくして、垢じみた身体に汚れた褌を身に着け、あちこち破れが目立つ不潔な着物を纏う異様な一団が関所を訪れた。
「お有難う御座います」
十人ほどの非人達が深々と頭を下げた。
「おお！来たか。今回下げ渡すのはその者達じゃ！」
奉行が縄掛けされて粗莚の上に座る志乃達を指さした。
「お有難う御座います」
非人達は揃って奉行に頭を下げると、蹲る志乃達に取り付いた。

垢塗れの男達の黒ずんだ手が伸びて来て、思わず悲鳴が上がった。
奉行は、男達の発する異様な臭いに顔を顰めて、「さっさと連れてまいれ！」と命じると、障子を閉じて奥に引っ込んでしまった。
「お奉行様！何かの間違いで御座います！もう一度お調べください！」と、奥に姿を隠した関所奉行を呼んだが、非人達は志乃達の縄尻を握り締めると無言で引き立てた。
「お有難う御座います」
見守る同心や番人に深々と頭を下げると、非人達は志乃と慎之介を取り囲むように関所を後にした。
こうして、姉弟は無理やり穢多の部落へ引き摺られるように引き立てられて行った。

笹川の家にたどり着いた千鶴は無事に男の子を生んだが、その子が慎之介の子であることを証明するものは無く、何時まで経っても慎之介は帰って来ることが無かった。留守宅を預かっていた叔父夫婦から追い立てられるように家から放り出されてしまった。

秋芳の地で母娘の売女が出没するとの噂が流れた。その売春婦の母娘が稲葉屋の女将と一人娘に似ていると人々の口に上ったが、その真偽を確かめた者はいない。

その頃、遠く離れた江戸の地で若い女盗賊が捕らえられ、市中引き回しの上、磔に掛けられ刑死したという事件が大きな評判となった。
その女盗賊は気のふれた妹の治療費を稼ぐために盗人稼業をしており、左頬に大きな痣が在るとの事で、女蝙蝠安などと瓦版屋が面白おかしく書きたて、市中の話題を集めた。

恵比寿屋は惣右衛門の独断経営で発展して来て、後継者も居なかったため、惣右衛門の死と共に雲散霧消するように潰れてしまった。
稲葉屋の大番頭が潰れた恵比寿屋の事業を引き継ぎ、清蔵やジェームスと組んで密貿易も続けたが、ペリー来航以降の鎖国政策の撤廃により長崎以外の港の開港と、オランダと清国だけで無く欧米諸国との貿易の開始により密貿易の旨味が無くなり、事業は衰退して行った。
その後、徳川幕府に忠誠を尽くすことを代々の家訓として来た秋芳藩は戊辰戦争で官軍と闘い、藩土を焦土と化して戦ったが無残に敗れ、多大な軍資金を藩から徴収された稲葉屋も滅亡してしまった。

時代は明治と代わり、世の中は落ち着きを取り戻し始めていたが、非人部落に落とされた志乃と慎之介、それと生まれたばかりの子を抱いて旅に出た千鶴のその後を知る者は誰もいない。

＜天保仇討無残旅　完＞

## 作者あとがき

取り敢えず、ここに長い話も終わりとなりました。
私の小説の書き方としては、出だしを書き始める際には、結末の一言一句まで決まっているので、後はその結末に至る様に、途中にエピソードを挟んで行くように書き進めるのですが、結末が分かっているだけに、逆にのんびりしてしまうところが有るのです。
ところが、この作品に関しては書き始めた際には、結末は全く決まっておらず、結末が分からないだけに、作者自らどんな結末になるのだろうとワクワクしながら書き進める事になり、逆に他の作品より早く終わる事となりました。

ネットを管理していると、どの作品が多く読まれたか分かるのですが、この天保仇討無残旅は、それほど人気のある作品ではありません。一番人気のある作品はやはり裏切りの代紋シリーズのようです。
作者としては各作品に思い入れはあるのですが、この天保仇討無残旅は好きな作品です。それは、江戸時代という現代の女性が置き忘れてしまった、羞恥とか気品のようなものをふんだんに持っていた時代を背景としているからです。
作者の筆力不足により、この時代の女性の恥じらいの姿を十分に描くことが出来なかったのは残念ですが、いづれ挑戦して丁寧に書き込んでみたいと考えております。

江戸時代は士農工商の身分制度が在ったと言われておりますが、これはカースト制のような

身分制度ではありません。侍は農工商に対して圧倒的に優越する地位を持っていましたが、農民が工人や商人に対して優越的立場を持っていたわけではありません。士農工商とは身分制度と言うより職能区分と考えた方が正しいと思います。
現在では職業選択の自由は憲法によって保証されており、商才さえ有れば、新しい事業を起こすことは可能ですが（職業選択の自由が認められている現在でも、自家用車を使っての旅客運送や酒造りなど種々の規制は在りますが・・)、封建制度の下では、基本的に職業選択の自由は無く、商人は商人同士で株仲間のような同業組合が作られ、他からの参入を絶望的に困難としていました。
例え恵比寿屋惣右衛門のように商才だけ有っても、何の伝手も無い一文無しの流れ者が大商人になるのは絶望的に困難であった筈です。
ですから恵比寿屋の話は完全にフィクションです。
この士農工商の職能区分の他に、主に演芸を提供する河原者や屠畜や皮加工や現在のエッセンシャルワークに相当する様な人の嫌がるが、しかし、社会にとって必要な仕事を提供する穢多と呼ばれる職能が在りました。
明治政府により士農工商は四民平等とされましたが、この河原者や穢多は四民平等から置き忘れられ、本来職業の区別であったものが、差別に置き換わったと考えられます。
従って、江戸時代からこのような差別が在ったのか疑わしいのですが、作品中では SM 的効果を演出するため差別が在ったものとして表現しております。

敬愛する団鬼六先生の官能小説の処女作である『花と蛇』では、主人公である静子夫人を含め７人の女性（及び一人の青年）が性的虐待を受けます。
この多くの女性の特徴分けや性格分けが大変だったのか、それ以降の作品群では虐待される女性の数は多くても３人止まりとなっております。
私も作品中に登場する被虐のヒロインの数はなるべく絞り込みたいと思っているのですが、この天保仇討無残旅では６人の女性（及び一人の青年）となってしまいました。
作品を書いているうちに時代背景や設定は違いますが、何となく『花と蛇』に似ていると思い始めました。
私の作品では被虐者の女達にも多少人間臭い愚かさが在り、虐待される要素を内在しているのですが、この天保仇討無残旅のヒロインの志乃は全く汚れた要素は無く、ただ悪人の奸計に嵌り虐待されるのです。これは『花と蛇』のヒロインの静子夫人と同じであり、虐待され

ながらも高貴さを失わないところの似通っていると思います。

団鬼六作品では、結末の無い終わり方が多い（従って何時でも話を続けられる）ですが、私の場合最後にオチを付けないと気が済まない性格なので此処に話を終わらせる事にしました。

最後まで作品に御付き合い頂きまして有難う御座いました。